

---

# バカと白黒と召喚獣

ailia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと白黒と召喚獣

### 【Nコード】

N3452X

### 【作者名】

ailia

### 【あらすじ】

試験召喚システムを導入した試験校である文月学園。

そのFクラスに一人の少年が転入する。

少年は天然だったり、影が薄かったり、ちよっぴり不幸だったり。

そんな少年にはある秘密が。

笑いあり、涙はないけど時々シリアス？

少年とFクラスの愉快な仲間たちが繰り広げる学園物語開始します！

## プロローグ

### プロローグ

つい数日前まで短い命を精一杯燃やすように咲き誇っていた桜が、葉桜に変わるころ。僕は皆より三日遅い新年度を迎えた。

転入生の振り分け試験当日に今まで住んでいたアパートが火事になったんだ。

おかげで振り分け試験は受けそびれるし、引越し作業のせいで新学期に間に合わなかった。

ちなみに出火原因は下の階に住んでいる住人のタバコの火の不始末らしい。

あの親父次に会ったら一発殴ってやる。

そして今日が僕の新学期初の登校日なんだけど……

現在時刻 8:55

「……寝坊だあああああああ！！！」

初日から完全に遅刻……。

僕は朝食を食べる暇もなく学校へ走る。

転入先の文月学園へ……。

## 主人公設定

名前 鮎川 蓮 16歳

容姿 黒髪にちょっと茶色っぽい瞳。髪は男としては長めで、肩に着く位。

顔は中性的。どちらかというど女性に近い顔立ちをしている。身長は明久よりも少し低いくらい。華奢。

成績 学年主席クラス。

得意教科は数学と英語（600点近い）。

苦手教科は保健体育（30点行かない）

他の教科は古典と現国が300点台前半。地理、政治経済が400点前後。

他は400点台。（英語Wは500点台）

総合科目は12教科で5000点くらい。

召喚獣 上半身は黒のジャケット。

下半身は黒目のジーンズ

右手に両刃の剣。

左手は指が刃物のように変形している。（関節はある）

その為両手で剣をもてない。

腕輪能力 「衝撃波」

左手から竜巻状の衝撃波を放つ。反動で自身の召喚獣はすごい勢いで後退

するため、コントロールが難しい。召喚フィールドの端

で放ち、

反動を抑えきれずにフィールドの外へ出てしまうと、敵  
前逃亡になる。

備考 一人暮らし。両親は死亡し、親類は姿を見せない。

バイトで生計を立てている。

## 主人公設定（後書き）

この小説では文月学園の教科は

数学、英語、英語W、物理、化学、世界史、日本史、

政治経済（現代社会）、地理、古典、現代国語、保健体育の

12教科とします。本来なら、生物が入ってないのはありえないのですが、生物も入れて13教科にしてしまうと、姫路さんの平均点が340点前後になってしまい、作中での姫路さんの

単教科の点数から「それはありえないだろ」ということから

作中で一度も使われた描写のない（野球でも出てこなかった）生物を除外することにしました。

## 第一問 人は見かけによらないのかも……

バカテスト化学

『調理のために火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」ではだめだという引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

鮎川蓮の答え

『問題点……マグネシウムは熱すると化学反応を起こして非常に脆くなる点。』

合金の例……アルミ鋳物合金』

教師のコメント

おおむね正解です。問題点は脆くなる前に発火して危険なので出来ればそちらを書いてほしかったです。合金の例で上げているアルミ鋳物合金は実際のフライパンなどで使われている合金です。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

第一問 人は見かけによらないのかも……

「鮎川、転校初日から遅刻してくるとはいい度胸だ。歯あ食いしばれ」

今の状況を説明するね。文月学園に転入した僕は初日から寝坊してしまっただ。

自分でも信じられないくらいにハイペースで走ってきたんだけど、後一步で学校、というところで立っていた筋肉隆々の大男に絡まれてしまっているんだ。

「あの……僕はお金なんか持ってないですよ。他の人にしたほうが……」

「誰が喝上げなどするか！！」

すごい勢いで怒鳴られた上に拳骨を落とされてしまった……この人何者なんだ？

「もうじき一時間目が終わる。授業が終わったらすぐにお前を紹介するからここで俺と一緒に待っておけ」

振り分け試験を受けられなかった僕は、自動的にFクラスになった。授業が終わるまで時間があるし、文月学園のことを説明するね。

文月学園は、科学とオカルトと偶然で出来た「試験召喚システム」という、世界初のシステムを導入している試験校なんだ。

この学校では、二年生から試験召喚戦争という試験召喚システムで呼び出せる、

「試験召喚獣」を用いたクラス間戦争が出来る。この戦争はクラスの間を掛けていているらしい。一年の終わりに次年度のクラス振り分け試験を受け、その結果を受けて、

A Fまでの六つのクラスに振り分けられるんだ。最も成績がいい生徒が集められているのがAクラス。B Eと続いて、最も成績が悪い生徒が集められているのがFクラスなんだ。

そして、クラスごとに教室の設備も分かれている。基本的に上位クラスのほうが設備が良いらしい。Fクラスは成績も設備も最低ってことか。大変そうだな。

いろいろと考えているうちに一時間目のチャイムが鳴った。

教室の中から出てきた先生とすれ違うように、筋肉隆々の大男もとい補習担当の西村先生がFクラスに入っていく。まさかあの人教師だったなんて……。

明久Side

まったく、須川の奴！ かわいい女子の転校生が来る、何て言うておいてもう三日たつじゃないか。Fクラスじゃなくて他のクラスへ転入したんだろうか。

どうでもいいや、とにかく今は糠喜びさせてくれた須川を肅清しなければ……

「お前ら席に着けー」

なにつ！ 鉄人だと！ なぜ授業が終わったばかりなのに鉄人が入って来るんだ？

まさか誰かが悪さをしたんだな！ 誰だ！

「今日、転入生を紹介する」

転入生だつて。新学期が始まってもう三日たつのに。須川の情報では怪我でも病気でもないらしいから普通に一日目に居ると思ったのに。でも、かわいい女子らしいからな。

男ばかりのこの空間に四人目の女子が来るなら大歓迎だ。

「先生！ 転入生は女子ですか？」

「男子だ」

すくがくわく……女子じゃないじゃないか！ 嘘つき！

須川のほうを見るともう仲間たちにボコボコにされていた。

「お前ら静かにせんか！」

鉄人の一声で静まり返る教室。この人の声は良くわからない力があるよ。

「おい、鮎川、入って来い」

鉄人が呼ぶと、転入生が入ってきた。

男子の制服を着た女子だった……

Side Out

先生に呼ばれて教室の中に入った。

ボロい……。想像以上だ。所々窓は割れているし、壁には隙間がある。

机は壊れかけの卓袱台だし、椅子の代わりに綿の抜けた座布団が置いてある。

それに何より、教室全体がかび臭い。畳腐ってるんじゃないかな。それに、クラスメイトの9割は男子だね。別に良いけど。

あつ、こんなこと考えている場合じゃなかった。自己紹介しないと。

「えつと、始めまして。鮎川 蓮です。気軽に蓮って呼んで下さい。趣味は読書と、

体を動かすことです。これからよろしくお願いします」  
こんな感じでよかったのかな。

自己紹介を終えて、席に着いた。まさか自由席だとは思わなかったよ……。

これから一年このボロい教室で勉強するんだ。それなりに平和そうだから良いか。

そんなことを思っていた僕だけけれど、まさかその数分後に僕の思っていた平和が覆されることになるなんて……。

## 第二問 自己紹介は大事だよね！

### バカテスト国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 「(1) 得意なことでも失敗してしまうこと」
- 「(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え」

### 姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

### 教師のコメント

正解です。他にも、(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』

(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

### 土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

### 教師のコメント

シユールな光景ですね。

### 鮎川蓮の答え

- 『(1) 猿を木から落とす』

### 吉井明久の答え

- 『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君たちは鬼ですか。

第二問 自己紹介は大事だよね！

蓮Side

席について西村先生が出て行くとすぐに、僕の周りにクラスメイトが集まってきた。

転入生なんだから当たり前か。さあ何を言われてもきちんと答えな  
いと。

「何で男子の制服を着ているんですか？」

「男だからです」

なにを当たり前前のことを聞いて来るんだ。僕は男なんだから女子の制服なんて着られるわけないじゃないか。

「おい、お前ら、まずは名乗りやがれ」

声のしたほうを見ると180cmはあるつかという大男が立っていた。

髪の毛はライオンみたいだ……

「俺は坂本雄二。このFクラスの代表をしている。俺のことは好きに呼んでくれ」

クラス代表か。各クラスの代表はそのクラスで最も振り分け試験の成績が良かった人がなるはずだから、坂本君はFクラスで一番成績が良いってことになる。

「僕は鮎川蓮です。これから宜しく。坂本君。あと、僕は男だからね」

「分かってる」

おおっ！ 坂本君はちゃんと僕のことを男って思ってくれているみたいだ。

「そこにお前みたいなの先輩が居るからな先輩？誰のことだろう。」

そう思つて坂本君が指さした方向を見ると、かわいい顔をして、男子の制服に身を包んだ生徒がいた。

「ワシは木下秀吉じゃ。よく間違われるのじゃがワシは男じゃ」なるほど。木下君も僕と同じで常日頃から女の子に間違えられるらしい。

「え〜？ 秀吉は『秀吉』ていう性別じゃないか。男子でも女子でもないよ」

誰だ！ そんなとんでもないことを言つた奴は！

「あつ、僕は吉井明久。こゝこの学園を代表するバカ」だよ。つて秀吉！ 僕の声真似して変な台詞つながらないでよ！ 誤解されるじゃないか！

「何が誤解じゃ。これでお主の立場が間違ひなく伝わつたじゃろ」木下君つて声真似できたんだね。あと、僕らの敵は吉井君つて言うらしい。

よし、ここは一言注意してあげよう。

「吉井君。僕も木下君もちやんとした男なんだよ。そんな頭の悪いこと言わないでよ」

あれ？ 言葉のチョイス間違つたかな？ 吉井君がものすごい勢いで落ち込んでる。

「え、え〜つと……」

「気にするな鮎川。明久のバカは昔からだ」

そつなんだ。じゃあ気にしない。別に女の子つて思われたから、見捨てるわけじゃないよ。

「次はウチね。ウチは島田美波。海外育ちで日本語の読み書きが苦手です。趣味は……」

珍しい。女子だ。かわいいし、趣味も女の子っぽいんだろうな……

「吉井明久を殴ることです」

前言撤回。この女の子ものすごい危険人物だ。なんだよその物騒この上ない趣味は！

吉井君のほうを見ると、彼は青ざめて震えている。どうやら本当らしい……。

吉井君がかわいそうに思えてきたよ。

「えっと、私は姫路瑞希です。趣味は……」

今度は桃色の髪をした女の子だ。桃色か、珍しいね。この子もかわいいけど油断は禁物だ。

こんな瘴気漂う空間に居るんだ。きつと島田さんのようになにか常識では測れない趣味を持っているぞ……

「料理です。よろしくお願いします」

ゴメン……。こんないい子を疑ってしまった自分が恥ずかしいよ。

そういえば、姫路さんが自己紹介しているときに後ろで吉井君たちが身震いしていたけれど何かあったんだだろうか？

「……土屋康太」

物静かな男子が名乗った。身長も低めだしきつと、気の弱い人なんだろうな。

「コイツのあだ名は寡黙なる性識者だ」

「……。(ブンブン)」

坂本君の言葉をすごい勢いで否定しているんだけど……。それにしてもムツツリーニってどういう意味だろうか？

「そのあだ名はムツツリスケベという意味じゃ」

木下君が説明してくれた。声真似だけじゃなくて読心術まで使えるんじゃないだろうか。

ムツツリーニのほうを見るけど、やっぱりすごい勢いで否定している。

なるほど確かにムツツリといわれればムツツリの気も……

ハッ！ そうか、ポケットから顔を覗かせているカメラはそういう意味だったのか！

……それ、犯罪だよな……。

自己紹介も終わり、休み時間もなくなったので皆自分の席に着いた。

なぜか坂本君が教壇に立っているんだけど代表として何か話すのかな？

「一昨日Dクラスに勝利した。明日で回復期間もあける。そこで、次はBクラスを相手に宣戦布告をする」

宣戦布告って試召戦争のことだよな？　じゃあこのクラスはDクラスに勝ったってこと？

ならどうして、こんなボロ教室のままなんだろう。

そしてこの日の昼休み。僕はこのクラスの恐るべき野望を知っていた……。

第三問 軽率な発言は命を危険に曝す……

バカテスト英語

以下の英文を訳しなさい。

『 This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly  
y. 』

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 \* x

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

第三問 軽率な発言は命を危険に曝す……

蓮 Side

昼休み。僕は屋上でFクラスの面々と昼食を食べることになった。  
「鮎川は、昼飯はどうするんだ？」

坂本君が聞いてきた。僕はいつも自分で弁当を作ってきてるんだけど。

「僕は弁当を作ってきたけど、坂本君はどうなの？」

「いや、購買でなんか買ってくるわ」

「じゃあ、僕も贅沢にソルトウォーターを……」

吉井君？ ソルトウォーターって要するに塩水だよな？

それは食べるって言わないじゃ……。

「明久よ、何度も言うがそれは食べるとは言わんぞ」

木下君も同じこと思ってたか。何度も、ってことは吉井君はいつもこんな感じなんだね……。

パンとかおにぎりとか買ってくれば良いのに。

「そう思うなら、なんか奢ってよ」

ちよっと待って、僕の予想しなかった台詞が飛び出したんだけど。

「吉井君は学校にお金持ってこないの？」

「鮎川、気にするな。明久は自業自得だ」

どゆこと？

「趣味に食費まで使い込む明久が悪い」  
なるほど。

「あの……私、今日はみんなの分のお弁当を作ってきたんですけど……」

吉井君の救世主になったのは姫路さんだ。

趣味が料理って言ってたもんね。でも、全員分か。やさしい女の子も居るんだね。

Fクラスに居るのがもったいないくらいだよ。

「あ、いや、僕は今から雄二と一緒に購買でパンを買ってこようと思ってるんだけど……」

「吉井君、せっかく姫路さんが作ってくれたんだから皆で食べようよ。そのほうが吉井君も食費の節約になるんじゃないの？」

「鮎川！ お主なんということを……」

「……………自殺行為」

僕間違ったこと言ったかな？ ものすごい勢いで咎められたんだけど……。

場所は変わって屋上。

何故だろう？ 僕以外の男子はまるで処刑される前の囚人みたいだ。

「鮎川君、恨むからね」

何で！ 僕は吉井君に恨まれるようなことしてないよ！ むしろ姫路さんの弁当が食べられるんだから恨むんじゃないやなくて喜ぶところでしょう！

「明久、諦める。鮎川は姫路の料理を食ったことがないんだ……」

坂本君まで……。 姫路さんの料理がなんだって言うんだよ。

「はい、皆さん召し上がれ」

「それじゃあ、遠慮なくいただきま〜す」

僕は卵焼きを口に入れた。木下君とムッツリーニが合唱してるのが気になるけど……。

Side Out

明久Side

今日の前で鮎川君が姫路さんの弁当を口にしてしまった。

うわっ！ やっぱり倒れちゃったよ。とにかく無事を確認しないと。

「鮎川君、大丈夫？」

「吉井君？ 大丈夫だよ」

良かった……今日の弁当は威力が弱めのようにだ……。

「川の向こうで母さんが手招きしてるんだ……」

「鮎川君！ ダメだ！ その川を渡ってはいけない！」

急いで蘇生しないと！ 鮎川君は姫路さんの料理は初めてのはずだから助かるかは三分と七分つてところか……。

「母さん、そんな格好で川に入ったら風引くよ……ハッ！」

良かった……何とか戻ってきてくれた。これでまた一つ尊い命が救われたのです。

Side Out

蓮Side

危うく渡ってはいけない川を渡るところだったよ……。

「ゴメン、皆……」

姫路さんの料理があんな危険物だとは思わなかったよ。

「いいんだ……。残りは明久が食うから」

「雄二！ 何てこと言ってくれるんだ！ 僕は内臓が退化してるんだからあんなの食べたら死んじやうよ！」

吉井君、今なら君の気持ちが良い分かるよ。

結局お弁当は吉井君がおいしくいただきました。

「そついえば、Dクラスに勝利した、とかBクラスに宣戦布告ってどういう意味？」

僕はさつき感じた疑問を坂本君に聞いている。もし試召戦争でDクラスに買っているんだったら、今Fクラスの設備があんなボロいはずがないからね。

「そのまんまの意味だ。俺たちは新学期初日にDクラスと試召戦争をして勝利した。」

俺たちの最終目標はAクラスだからDクラスの設備は交換しないでいるだけだ」

ふうん。Dクラスじゃ満足しないってことだね……って、Aクラスが目標？

「そ、それって無謀な挑戦って言うんじゃないかな？」

成績最悪のFクラスと、成績最高のAクラスの点数は文字通り桁が違う、って西村先生が言ってた。そんなところと勝負して勝てるものなのかな？

「お前が言いたいことはわかってる。安心しろ。このクラスは……最強だ」

そういつて笑う坂本君の顔は獲物を虎視眈々と狙っているようで、それでいて、見ているものに安心感を与えるような、そんな自信たっぷりの顔だった。

#### 第四問 作戦は大事。でも友達も大事・・・

バカテスト数学

「(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する  $X$  の値を一つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、 $\{ \}$  ?  
の中から選びなさい。

?  $\sin A + \cos B$                       ?  $\sin A - \cos B$

?  $\sin A \cos B$                                       ?  $\sin A \cos B + \cos A$

$\sin B$

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『(1)  $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ?』

教師のコメント

そうですね。角度を「」ではなく「」で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1)  $X = \text{およそ } 3$ 』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分かりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

第四問 作戦は大事。でも友達も大事……。

蓮Side

昼休みに、坂本君から聞いた話によると、明日FクラスはBクラスに宣戦布告をするらしい。そして、「必殺料理人」の姫路さんは本来ならばAクラス入り確実の学力を持つ才女らしい。振り分け試験のときに高熱を出してしまって途中退席。

途中退席は全科目0点になってしまいうらしい。そのせいでFクラスなんていう最低の環境で勉強しなければいけなくなつたってわけか。で、「大好きな」姫路さんのために吉井君が試召戦争を提案した、てことらしい。

やっぱり、吉井君は優しいよね。さっきの弁当の件は置いておくとして。

「鮎川、お前は明日対Bクラス戦が始まったらすぐに回復試験を受けてくれ」

回復試験するのは試召戦争が始まったら基本的にいつでも受けられるらしい。

召喚獣の戦闘で消費した点数を、テストを受けて回復させることが出来るんだって。

「あれ？ 鮎川君は戦闘に参加しないの？」

「いや、僕は「バカもいい加減にしろよ明久」そこまで思っていないからっ！」

僕は振り分け試験を受けられなかったから、新学期の姫路さんと同じで全科目0点なんだ。

「そこまでつてことは、僕のことバカだって思っではいるんだね…

…」

しまった、吉井君へのフォローを忘れてた。吉井君が教室の隅っこでいじけている！

「バカはほつといて話を進めるぞ」

吉井君と坂本君は本当に友達なんだろうか？

「気にするな、明久と雄二はちよつと変わっておるのじゃ」

「分かった」

「分からないでえ〜そこは気にして！」

吉井君がなんかいってるけど知らない！ だって気にするなって言われたもん

「そついえばなんでBクラスなのさ？ 勢いは付いたんだから、A

クラスを攻めるんじゃないの？」

吉井君はようやく喋れたようだ。

「BクラスにもDクラス同様、俺たちがAクラスに勝つための要素がある。

この際だからはっきりと言う。俺たちじゃ、どんな作戦を使ってもAクラスには勝てない」

「えっ？ それじゃあ、目標はBクラスに変更つてこと？」

吉井君が坂本君に疑問をぶつける。

Aクラスが目標つて言っっておきながらAクラスには勝てないつて言うし。

僕には坂本君が勝てない勝負をするような人には見えないんだけれど。

「いや、目標はあくまでAクラスだ」

「雄二（坂本君）さっきと言ってることが矛盾してるよ」

「まあ聞け。クラス単位では勝てないから、Bクラスと試召戦争のシステムを使ってAクラスとは一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ち？ どうやって？」

吉井君は納得していない様子。僕も、よく分かってないけど。

「明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合どうなるか知ってるよな」

吉井君はこの学園に二年いるんだからもちろん知ってるよね。

「ええっと……」

知らないんだね……。姫路さんが小声で教えてあげている。

料理の腕はともかく優しいな

「設備を1ランク落とされるんだよ」

「まあ良い。じゃあ明久上位クラスが負けた場合は？」

確か、負けた相手と設備を入れ替えなきゃいけないんだよね。

「悔しい」

僕の予想をはるかに上回る回答が返ってきた。

「ムツッリーニ、ペンチ」

「ややつ、僕を爪切り要らずの体にする動きがっ」

生爪か！ 生爪なのか坂本君！

それは拷問だぞ！

「相手のクラスと設備を入れ替えられちゃうんですよ」

姫路さんのフォローが。吉井君、命拾いしたね。

「そつだ、このシステムを利用してBクラスをAクラスに攻め込ませる。Fクラスに負けると最低の設備だが、Aクラスに負けてもCクラス相当の設備で済む。交渉はまず上手くいくだろう」

「Aクラスには、Bクラスとの試召戦争の後に攻め込むぞつて言つて一騎討ちに持ち込むんだね」

「そつだ。鮎川が理解できてるんだから、明久以外は分かつただろう」

さりげなく吉井君への罵倒を混ぜる坂本君。

この二人の間柄が本当に気になる。

「というわけで明久、今日のテストが終わつたらBクラスに宣戦布告に行つて来い」

あれ？ 下位勢力の宣戦布告の使者つて大体ひどい目にあつよね……。

「断る！ 雄二が行けばいいじゃないか！」

「やれやれ、それじゃあジャンケン決めよう」

「よし、望むところだ！」

どうしてだろう、吉井君が坂本君に乘せられているような感覚を覚える。

「ただのジャンケンじゃ面白くない。心理戦ありで行こう」

心理戦つていうと、自分はパーを出す、とかいつて本当にそうするかの駆け引きのことだね。

「じゃあ僕はグーを出す」

「それじゃあ俺は……明久がグーを出さなかつたら打ち殺す」

えつ……。今、ジャンケンの心理戦で聞いたことない単語が出てきたよ……

「いくぞ、ジャンケン……」  
問答無用か……

「ポン！」

坂本vs吉井  
パーvsグー

吉井君、後出しだったのに負けたよ……

「よし、逝ってこい明久」

「絶対に嫌だ！」

「Dクラスのと看みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

やっぱり、宣戦布告の使者は殴られるんだ……

「それなら今度こそ大丈夫だ。保障する」  
すごい自信だ。Bクラスに知り合いでもいるのだろうか。

「Bクラスには美少年好きは多いらしい」

「そっか、それなら大丈夫だね」

待つて！ 色々とおかしい点があると思うんだ。

吉井君もそれで納得しないで！ 確かに美少年といえなくもないけど！

「でも、お前不細工だしな……」

「失礼な！ 365度どこから見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度だな」

「微妙な少年だね……」  
「皆大嫌いだ！……！」

吉井君は泣きながら去っていった……

「……言い訳を聞こうか」

ボロボロになった吉井君が帰ってきた。

坂本君、ここはちゃんとフォローを……

「予想通りだ」

ちよっ！ 坂本君、そんな事言ったら

「くきいー！ 殺す！ 殺し切るー！」

「吉井君おちて「落ち着け」」

「ぐふあっ！」

「あんまりだよ坂本君！ 吉井君がっ」

鳩尾に拳がめり込んで……

「先に言ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝  
てるんじゃないぞ」

坂本君が行っちゃったよ。

坂本君、君は鬼だ……

第五問 やる気？ 殺る気！

バカテスト物理

問 以下の文の（ ） に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

鮎川蓮の答え

『竜王の殺息』  
下リコンプレッス

教師のコメント

先生もとあるシリーズは好きですがあれは光とはまた違うと思います。

鮎川蓮のコメント

まさか真面目に返されるとは思わなかった。

第五問 やる気？ 殺る気！

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

Bクラスとの試召戦争当日を迎えた。坂本君は教壇に立って、クラスメイト相手に演説をしている。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

字が違う気がする……

『おおーっ！』

このクラスのやる気は十分みたい。

テスト潰けだったはずなのにすごいやる気だ。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開始直後の渡り廊下線は絶対に負けるわけには行かない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。野郎共、きつちり死んで来い！」

いや、死んじやだめだから。

「が、頑張ります」

姫路さん、若干引き気味だ。僕もだけど。

『うおおーっ!』

すごい。さすが姫路さんだ。たった一言で、前線部隊の士気を最大にまで引き上げている。

Fクラスの作戦を説明すると、まず試召戦争開戦直後の廊下での戦闘に勝ちに行くらしい。

戦力もFクラス五十人中四十人をつぎ込む。前線部隊の士気はFクラス一の才女姫路さんが取る。

廊下では勝てるだろうけど、代表の坂本君の守りが薄くなる。

僕も、まだ回復試験が終わってないから参加できないし。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

Side Out

明久Side

昼休み終了のチャイムが鳴り響き、僕たちは一斉に教室を飛び出す。

僕たちは数学を主力に、戦線を拡大して一気に渡り廊下を取る作戦だ!

「いたぞ、Bクラスだ」

「高橋先生を連れてくるぞ!」

正面からゆっくりとした足取りでBクラスメンバー十人程度が歩いてくる。

「生かして帰すなー！」  
誰かの叫びが皮切りになり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長男 vs Fクラス 近藤吉宗  
総合 1943点 vs 764点』

『Bクラス 金田一裕子 vs Fクラス 武藤啓太  
数学 159点 vs 69点』

『Bクラス 里井真由子 vs Fクラス 君島博  
物理 152点 vs 77点』

だめだ！ 圧倒的過ぎる！

第一陣は話にならない。早くフォーローしないと！

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」  
姫路さんがやってきた。男子の全力疾走には付いてこれなかったんだらう。

「来たぞ！ 姫路瑞希だ！」  
Bクラスの誰かが声を上げる。やっぱり姫路さんを警戒していたようだ。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」  
「は、はい。行って、きます」  
そのまま、戦場へ紛れ込む姫路さん。

あ、早速勝負を挑まれる姫路さん。  
Bクラス二人掛りだ。

『Fクラス 姫路瑞希 vs Bクラス 岩下律子&菊入真由美  
数学 412点 vs 189点 & 151点  
』

姫路さんの召喚獣は、左手首にきれいな腕輪をしていた。

姫路さんの召喚獣が左手を相手に向けた、と思ったら相手の一人の召喚獣が消し炭になった。あれを、僕が喰らったらと思うと……

「岩下と菊入が戦死したぞ！」

Bクラス二人を戦死させると、Bクラスに驚愕の表情が浮かぶ。

「姫路さん、とりあえず下がって」

「あ、はい」

相手の士気は挫いたし、腕輪を使って消耗した姫路さんにはいったん下がってもらおう。

クラスの皆もやる気になっているし、これなら、今日の戦闘は目標どおり、

Bクラスを教室に釘付けにすることで終了するだろう。

「明久、ワシらはいったん教室に戻るぞ」

「ん？ なんで？」

戦況を眺めていた僕のところ、秀吉がやってきた。

「Bクラスの代表じゃが、あの根本らしいのじゃ」

「根本ってあの根本恭二？」

「うむ」

根本恭二とは、とにかく評判が悪い。

噂ではカンニングの常連だとか。目的のためには手段を選ばないらしく、曰く

『球技大会で相手チームに一服持った』とか、『喧嘩に刃物は当然装備』とか。

さすがにそこまで卑怯とは思わないけど、用心に越したことはない。

「なるほど。戻っておいたほうがよさそうだね」  
「雄二に何かあるとは思えんが、念のための」  
姫路さんに一言報告して、僕と秀吉は何人かを連れて教室へと引き返した。

Side Out

蓮 Side

僕が、一折の試験を受け終えて、Fクラスに戻ってみると、そこにはボロボロになった卓袱台、荒らされた教室、怪我をしている吉井君と、少しはなれたところで血をぬぐっている島田さんが……ってちよつと待った！

「島田さん、いくら吉井君が気に入らないからって、ここまで暴れなくても……」

「違うわよ！ 教室はウチが帰ってきたときからこんな感じよ！」  
島田さんが吉井君を折檻している巻き添えでこうなったんじゃないんだ。

「鮎川、試験は終わったのか？」

坂本君が聞いてきた。

「うん。さすがに一日で全教科受けるのは疲れたよ」  
最初は、試召戦争で使う教科だけを受けるつもりだったんだけど、Bクラスが総合科目も使ってきたから、急遽全科目受けることになったんだ。

「島田さんじゃないとしたら、この教室は誰がやったの？」  
今、一番の疑問だ。

「俺がBクラスの連中に協定を持ちかけられてな。協定調印のために教室を空けている間にBクラスの奴らが教室を荒らしやがったんだ」

「どんな協定だったの？」

「午後4時を過ぎたら、その日の戦闘を終了し、翌日の9時に同じ状況から再開する。」

その間は試召戦争に係わる一切の行為を禁止するって奴だ」

「姫路さんのため？」

姫路さんが万全の状況で試召戦争に臨めるから、その協定はFクラスに有利になる。」

「そうだ。やっぱり明久とは頭の出来が違うな」

「なんだと！ バカ雄二！」

「吉井君は置いといて……」

「鮎川君！ 君まで僕をそんな風に扱うの？」

話が進まない……

「ハプニング（と言っていいのか？）はあったけど、今のところは順調に進んでるってことだね？」

姫路さんが万全の状態で戦える以上、Fクラスは有利だ。さっき吉井君から聞いたけれど、

Bクラスを教室に押し込む作戦も成功しているらしいし。

「……Cクラスの様子が怪しい」  
ムツリーニか。

確か、Fクラスの情報参謀だったよね。

「漁夫の利を狙うつもりか、いやらしい連中だな」

FクラスがBクラスに勝つても、消耗は激しい。

もともとの点数が少ないFクラスが消耗していれば、他のクラスからは格好の的だろう。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、  
とでも言えばおとなしくなるだろう。」

「それに、僕たちが勝つなんて思ってもないだろうしね。」

「よし、今から行ってくるか。」

「そうじゃの。」

「いや、秀吉は残ってくれ。お前の顔を見られると、万が一のとき  
にやろうと思っっている作戦に支障がでる。」

作戦？ 坂本君にはまだ作戦があるのか。

「よく分からんが、雄二がそういうのなら従おう。」

「じゃあ行こうか。ちよつと人数が少なくて不安だけど。」

坂本君、吉井君、姫路さん、島田さん、ムッツリーニ、僕は協定  
を結ぶためにCクラスに向かった。

## 第六問 罾と逃走と初戦闘！

バカテスト化学

問 ベンゼンの化学式を書きなさい

姫路瑞希の答え

『C6H6』

教師のコメント

簡単でしたね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師の答え

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B-E-N-Z-E-N』

教師のコメント

後で土屋君と職員室へ来るように。

鮎川蓮の答え

『Benzol』

教師のコメント

それはドイツ語ですし、化学式ではありません。

第六問 罨と逃走と初戦闘！

蓮 Side

僕たちFクラスの面々は、Cクラスと停戦協定を結ぶためにCクラスを訪れていた。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。Cクラス代表はいるか？」

「私だけど。何の用？」

坂本君の呼ばれて出てきたのはいかにもきつそうな女子だった。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た」

「クラス間交渉？ ふうん……」

なんだろう。笑顔がいやらしいとかそんな問題じゃなくて、何か大事なことを見落としている気がするんだけど……

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……どうする？ 根本クン」

分かった！ これはBクラスの罨だ！ なるほど、BとCクラスの代表にはつながりがあったと言うことか。

CクラスをおとりにしてFクラスが協定を結びに来るように仕向ける。

Fクラスはこの時点で協定に違反している。本当はBクラスのほうが先に協定を破っているけれど、敵クラスにあんな妨害をしてきた

根本君のことだ、先生にも嘘八百で自分たちに都合のいいように説明しているだろう。  
敵ながら天晴れと言わざるを得ないな。うん。いや、噂の出所を調査してから来るべきだったよ。

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

僕が思案にふけてっていると根本君の怒号が聞こえた。

Fクラスの皆は……ってもういない！

「ちよっ、皆何で置いていくのさ！」

幸い僕にBクラスの人の注意は向いていない。

Cクラスの後ろの扉から脱出する……。

Side Out

明久Side

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

今の状況はかなりマズイ。僕たちではBクラス相手に勝負にならない。

「はあ、ふう……」

「姫路、大丈夫か？」

姫路さんが遅れ始めた。この全力疾走は姫路さんにはつらいだろう。けれど急がなければBクラスに追いつかれてしまう。

「雄二！ ここは僕が残って食い止めるから、姫路さんを連れて早く！」

まさか僕がこんなことを言う日が来るなんて。

「……分かった。ここはお前に任せる」

「……（ぴたっ）」

ムツッリーニも残るつもりようだ。だけど、ムツッリーニにも大

事な役割があるはずだ。

ここで失うわけには行かない。

「ムッツリーニも一緒に逃げて。明日の戦争の鍵は多分ムッツリーニが握るから」

「んじゃ、ウチは残ってもいいのかしら。隊長どの？」

僕の隣には一緒になって立ち止まった島田さんがいた。

「……頼めるかな？」

「はいはい。お任せあれっと」

「……(グツ)」

ムッツリーニは僕たちに親指を立てて走り去った。

これで、雄二、姫路さん、ムッツリーニを逃がすことが出来た。

あれ？ 誰か忘れてる気がする。

「島田さん。鮎川君は何処にいるのかな？」

「あつ……Cクラスに忘れてきたわ……」

ゴメン！ 鮎川君！ 君の事は多分……忘れない！

「……さて。どうするの？ 隊長どの？」

「うん。僕に考えがあるんだ」

「え？ アンタに？」

島田さんの表情が物語っている。僕は信用されていない！

「僕だつて補習室なんかには行きたくない。任せといて」

「ふーん。ま、アンタがそこまで言うなら信用しましょうか」

『いたぞっ！ Fクラスの吉井と島田だ！』

『ぶち殺せ!』

正面から追っ手がやってくる。長谷川先生も一緒だ。

「Bクラス!　そこで止まるんだ!」

僕の手腕を見せてやる!!

Side Out

蓮 Side

『こいつ馬鹿だあーっ!』

Bクラスの人に気づかれないようにCクラスから脱出して、辺りを彷徨っていると、

叫び声が聞こえた。

「もしかしたら、Fクラスの皆が戦っているのかもしれない」  
行ってみよう。ここからはそれなりに遠いな。

「ウチのことを愛してるって、言ってみて?」

叫び声があったところに着いた。すると、消火器を持った島田さんが吉井君に告白紛いの事をしていた。二人に何があったんだろう。

「ウチのことを愛してる!」

「吉井君……さっきのはそういう意味じゃないと思うけど」  
吉井君、どういふ思考回路してるんだろう?

『何だこいつ!』

『こいつもFクラスだぞ!』

あつ、吉井君に突っ込みを入れていたら見つかってしまった。

Side Out

明久Side

「鮎川君！ 無事だったんだね！」  
Bクラス三人に囲まれて窮地に陥っていた僕たちの前に戦死したと  
思っていた鮎川君が現れた。

「吉井君、僕のこと忘れてたよね？」  
何でだろう。鮎川君の背後に鬼が見える……。

「何だこいつ！」  
「こいつもFクラスだぞ！」

鮎川君もBクラスの標的になってしまった。  
三対三になったとはいえ、相手はBクラス。まだこちらの分が悪い。

「えっと、試験<sup>サモン</sup>召喚」  
鮎川君が、戸惑いながらも召喚獣を召喚する。

『数学 鮎川蓮 vs Bクラス三人  
516点 vs 合計381点』

勝負はあつという間についた。

Side Out

蓮Side

初めて試験召喚獣を呼び出した。思っていたよりも動かす感覚が自分の体と違う。  
でも、誤差の範囲内かな。

僕の召喚獣は、上はジャケット、下はジーンズ。共に色は黒だ。服装はその辺にいるチョイ悪親父みたいな感じんだけど、手に持つてる武器が穏やかじゃない。  
右手には、幅も長さも長い両刃の剣。重そうだ。  
そして、左手はなぜか人の形をしていない。指全体が刃物みたいになつてる。  
しかも右手の指の何倍も長い。関節はちゃんとあるからパツと見ちよつと気持ち悪い。

『何だこの点数は!』

『こんな奴がFクラスにいたのか?』

Bクラスの人の驚いた声が聞こえる。たしか単教科で200点取れば学年でトップクラスだと聞いたから、500点は珍しいのだと思つ。

「数学は得意だからね」

一応Bクラスの人に声をかけておく。

僕が言い終わらないうちに一番点数の高い人が突進してきた。召喚獣を左に移動させて、すれ違いざまに右手の剣で攻撃する。その一撃で敵の召喚獣は消滅した。後二人。

『うおおおお!』

叫びながら、一人が攻撃してきた。振り下ろされる剣をこちらも剣

で受け止める。

点数に差があるからなのか、片手でも簡単に受け止められた。

「はあっ」

右手を大きく振って、敵の召喚獣を弾き飛ばす。相手が踏み込んできたところに剣の切っ先を突き出す。相手の召喚獣は自身の勢いを止められずに剣に突き刺さって消滅した。

後一人。

『隙あり！』

いつの間にか僕の召喚獣の後ろに回っていた敵が剣を振り下ろす。

前に突き出している右手の剣は間に合わない。

キンッ

『何っ』

なんか硬そうに見えた左手でガードすると、甲高い金属音と共に相手の剣が止まった。

相手は驚いているけど、僕も驚いている。まさか剣を止められるほど硬いとは……。

驚いて隙が出来た相手に右手の剣を振り下ろす。

思ったよりもあっけなく、相手の召喚獣は全滅した。

「戦死者は補習うー！ー！！」

Bクラス三人は何処からともなく現れた西村先生によって連行されていった。

「凄いよ鮎川君！ どうやったらそんな点数を？」

召喚獣での戦闘を終えて、一息ついていると吉井君がすごい勢いで迫ってきた。

「近い！ 吉井君近いよっ！」

「数学は得意だからね」

吉井君を落ち着かせた後、Fクラスに戻りながら吉井君、島田さんと話した。

「ウチも数学は得意だけど、500点なんて絶対取れないわ」

「そうだよ、僕なんて100点すら取れないよ」

「吉井君、そこは威張って言うところじゃないよ」

「吉井君！ 無事だったんですね！」

Fクラス前では、姫路さんが待つていた。

「うん。鮎川君のおかげで生き延びれたよ」

「吉井君、あんまり僕の点数は言わないでくれないかな」

吉井君に小声で話す。

「どうして？」

「あんまり期待されたくないのと、僕の点数が広まらないうちは奇襲が出来るからね」

Bクラス戦で出番はなくても、Aクラス戦では必ず奇襲が必要だろう。

奇襲できる高得点者の情報は出来るだけ隠していたほうが都合がいい。

「鮎川君がどうかしたんですか？」

「いや、なんでもないだあっ！」

姫路さんと吉井君が話していると、なぜか島田さんが吉井君の足を踏みつけた。

「島田さん、一体何を……」

「（キツ！）」

「あ。い、いや。美波」

あれ、この二人はいつの間にも名前前で呼び合うようになったらう。大体想像はつくけど。

「……二人ともずいぶん仲良くなつたみたいですね？」  
何故だろう？ 温厚なはずの姫路さんの後ろに鬼、いや般若が見える。

「さて、お前ら」

坂本君が声をかける。

「こつなつた以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦と言  
う形になるだろうが、  
Bクラス戦の後にCクラスと戦うのはきつい」  
Bクラスは上位クラス。FクラスにとつてはBクラスだけでも勝て  
るか分からないのにその後Cクラスに攻められたらまず間違いなく  
負けるだろう。

「それならどうしようか？ このままじゃ勝つてもCクラスの餌食  
だよ？」

「そうだね」

「そうじゃな……」

教室の空気が重くなる。

「心配するな」

坂本君が声を上げる。その顔は野性味たっぷりの笑顔を纏っている。

「向こうがそう来るなら、こちらにも考えがある」

「考え？」

「そうだ。明日の朝に決行する。目には目を、だ」

その日はそれで解散になり、続きは翌日へと持ち越しになった。



第七問 感じていた違和感が解決したときは大抵手遅れになっている。

バカテスト英語

問 goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい。

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『good - better - best

bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級や最上級は語尾に -erや -estをつけるだけではだめです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad - butter - bust』

教師のコメント

『悪い』、『乳製品』、『おっぱい』

第七問 感じていた違和感が解決したときは大抵手遅れになっている。

蓮Side

翌日。

「今から、昨日行った作戦を決行する。秀吉」

そういつて坂本君は木下君に女子の制服を……ってええっ！

「待つんだ坂本君！ 木下君が挑発に行くのにどうして女装する必要があるの！ それと木下君もそこは抵抗しようよ！」

『おおおおおっ！』

僕の突っ込みはその場で着替え始めた木下君に何故か興奮したFクラスの叫びでかき消された……

「どっじゃろうか」

うん。分かつてはいたけれど、木下君は女装が似合うね。

「ばっちりだ。よし、今からCクラスに向かうぞ」

「ねえ、どうして木下君を女装させたの？」

Cクラス前、一人でCクラスに向かつていく木下君を見ながら、僕は坂本君にさつきから感じていた疑問をぶつけた。

「まあ、見てれば分かる」

八重歯を見せながら笑う坂本君。なんだかとても悪役っぽい笑みだ。

小声で話していると、木下君がCクラスに入っていく姿が見えた。

「静かになさい！ この薄汚い豚共！」

いきなり凄い台詞が飛び出した。それに木下君の声がいつもと違って聞こえる。

『なによ！ アンタA……！ ちょっと……』

Cクラスの小山さんが何か言っているけど、ヒステリックな声の所為か良く聞き取れない。

「話しかけないで！ 豚臭いわ！」

自分からたずねておいて話しかけるな、はないんじゃないかな。

「私はね、こんなに臭くて醜い教室が同じ校舎にあるなんて我慢ならないの！ 増してブタ臭い貴女たちなんて豚小屋で十分だわ！」  
『なっ！ 言うに事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって！』

「どうやら、小山さんにとってはブタ小屋＝Fクラスらしいね」

「否定は出来ないがな」

「いや、いくらFクラスでも、ブタ小屋よりは文明的な教室だと思うよ。一応畳もあるし」

ブタ小屋には畳は敷いてないよ。

「手が汚れてしまうから本当はいやだけど、近いうちに貴女達をふさわしい教室へ送ってあげようと思うの。今、試召戦争の準備もしているし、覚悟しておきなさい。近いうちに私たちが薄汚いブタの

貴女達を始末してあげるから！」

とてつもなくヘビーな捨て台詞を残して木下君が教室から出てきた。

その顔はどこか誇らしげであり、スッキリした様な顔でもある。

「どつじやったろうか？」

木下君が聞いてくる。

「ああ、素晴らしい仕事だった」

「……（コクコク）」

坂本君の言葉に、ムツツリーニが頷いている。確かに、挑発としてはこの上ないほどに効果的だったと思うよ。小山さん以外のCクラスの人たちがかわいそうだ。

S i d e O u t

明久S i d e

「扉と壁を上手く使うんじゃ！」

秀吉の挑発の後、僕たちは昨日の試召戦争の続きをしていた。

雄二の作戦は『Bクラスを教室内に閉じ込める』らしい。

そんなわけで、Bクラス入り口付近を主な戦場にして、作戦を遂行させようとしているんだけど、さっきから姫路さんの様子がおかしい。

なんていうか、自分は試召戦争に参加しないようにしているように見える。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」  
秀吉の檄が飛ぶ。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

左出入り口にいるのは古典の竹中先生だ。

Bクラスは文系が多いので、文系教科で攻められれば分が悪い。

「姫路さん、お願い！」

「あ、そ、そのっ………！」

姫路さんは、戦線にも加わらず、泣きそうな顔でオロオロしている。このままじゃ突破される！

僕はBクラス左側の出入り口まで走り、竹中先生に耳打ちした。

「先生、ズラ、ずれてますよ」

「っ……！」

頭を押さえて周りを見回す竹中先生。こんなところで「いざと言うときの教師脅迫ネタ〈古典教師篇〉」を使うことになるとは思わなかった。

「しよ、少々席をはずします！」

これで少しの間ができる。

「古典の点数が残っている人は左側へ回って！ 消耗した人は補給を受けるんだ！」

この隙にクラスへ指示を出す。これですこしは持ちこたえられるだろう。

「姫路さん、どうかしたの？」

姫路さんに声をかける。姫路さんがこうなっている原因を見つけないと動きが取れない。

「そ、そのっ、なんでもないですっ……！」

そういつて大きく頭を振る姫路さん。その動作は不自然なほど大きく、何かあるのがバレバレだ。

「そうは見えないよ。何かあったのなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし」

「ほ、本当になんでもないんです！」

そうは言うけど、今日の姫路さんは絶対におかしい。

「右側入り口、教科が現代国語に切り替えられました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致られた模様！」

右側入り口までBクラスが得意とする文系教科に切り替えられるなんて、結構ピンチだ！

「私が行きます！」

そういつて戦場に加わろうと駆け出す姫路さん。

「あっ」

しかし、何かを見た途端にその動きを止めた。

何かあると思って、姫路さんの視線の先、Bクラスの中をたどってみると、腕組みしながらこちらを見ている卑怯者……根本君の姿があった。その手にはかわいらしい封筒が握られている。

「……なるほどね。そういうことか」

昨日の協定からおかしいとは思ってたんだ。体の弱い姫路さんに有利になる協定をBクラスから持ちかけてくるなんて、まるで姫路さんを無効化する手段を持っていたとしか考えられない。姫路さんさえ無力化できればあの協定はBクラスに有利なものになる。

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれだけじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕はあるから行くね」

「あ……！」

姫路さんは何か言いたげだったが、気にせず背を向けて走り出す。大事な用ができたから。

「面白い事してくれるじゃないか、根本君」  
思わずそんな台詞が口からこぼれる。

あの野郎、ブチ殺す。

Side Out

蓮 Side

Cクラスから帰ってきた後、すぐに始まったBクラス戦二日目。僕は、本陣に残るように言われ、坂本君と教室に残っていた。

「ねえ坂本君、どうして僕を本隊に入れたの？」

転入生で、召喚獣の扱いにもなれていない新人を代表を護る役目がある本隊に入れるなんて普通は避ける。

「お前が戦力になるからだ」

「どういう意味？ 僕は転入生で試召戦争どころか、召喚獣にもなれてないんだけど」

実際、昨日吉井君たちを助けたあの一回しか召喚したことないし。

「お前が、Cクラスから無事に帰ってきたからだ」

「それはBクラスに人の注意が坂本君たちに向いていたからで……」

「そつちじゃない。明久と島田を助けたときだ」

あれ？ 坂本君には話してないはずだけど。

「島田と明久がBクラスの追っ手を食い止めて、尚且つ戦死せずに戻ってくるには正攻法じゃ無理だ。それこそ、消火器で煙幕を張るとかな」

確かに、昨日僕が駆けつけたときには島田さんがピンを抜いた消火器を持っていた。

消火器を煙幕代わりにするつもりだったんだ……

「だが、明久たちが消火器をぶちまけた、と言う話は入ってきていない」

消火器なんて勝手に撒いたらそれなりに話題にはなるよね。

「つまり、明久と島田は、正攻法でBクラスを食い止めてから戻ってきた事になる……」

お前と一緒にな」

坂本君は最後の部分を特に強調した。

「確かに僕はFクラスに戻ってくる途中で吉井君たちと合流したよでも、そのときにBクラスの方は三人に減っていたし、三対三なら正攻法でも……」

「無理だな。Bクラス一人が撤退に追い込まれるほどのダメージを与えるまでに、明久はともかく、島田はかなり消耗していたはずだ。教科は数学だったしな。」

つまり、お前がBクラス三人を相手に出来るほどの戦力を持ってい

る事になる」

坂本君は何処まで知っていて、何処からが推理なんだろう。とても最下位クラスの間人とは思えない頭の回転だ。

「もし、僕にそんな戦力があつたとして、それなら戦線に出たほうが良かったんじゃない？ Bクラスを閉じ込めるのは難しいと思うよ」  
「ああ、そこはちゃんと考えてあるし、何よりお前は伏兵だ。 Aクラス戦用の……な」

まだ Bクラスに勝つてもいないのに、もう Aクラス戦のことを考えて策を立てている。

一流の軍師、策士とは、こういう人のことを言うんだろう。決して他人を蹴落とすだけの卑怯者じゃない。

だけど。

「坂本君は、 Bクラスを押さえておけると思っている？」

Aクラス戦も、 Bクラスに勝たなきゃ始まらない。目下の問題はそれだ。

それに気になることもある。

「ああ、 Bクラスごときなら、 姫路がいれば何とかなるだろう」  
姫路さん。学年トップクラスの彼女なら……

「昨日の協定に違和感があるんだ。 Bクラスが態々こちらに有利な条件を提示してくるなんてありえない」

あの協定が Fクラスにとって有利なのはある一点だけだ。 だけど Fクラスはその一点を生命線にしている。 もしその生命線を封じる事ができるとしたら……

「Cクラスへおびき出すための布石だったんだ。気にする事はない」  
違う、それだけじゃない。

「何か姫路さんを動けなくする策が『雄一!』」

教室に吉井君が飛び込んできた。

第八問 男には、やらなきゃいけない時がある！

バカテスト保健体育

問 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎えることで第二次成長期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、

初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43Kgに達する頃に初潮を見ることが多いため、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また体重のほかにも初潮年齢は人種、気候、社会的環境や栄養状況などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

鮎川蓮の答え

「ふあ、ファーストキス……」

教師のコメント

回答から何故か気恥ずかしさを感じますが外れです。

第八問 男には、やらなきゃいけない時がある！

蓮Side

僕が坂本君に昨日の協定について感じた違和感を話そうとしていたとき、吉井君が教室に飛び込んできた。少し息が切れていて、何か緊急事態があったことを思わせる。

「雄二ー!!」

「何だ明久、脱走か？ チョキでしばくぞ」

「坂本君、たぶんここはシリアスな場m」話しがあるんだ」

遮られた。吉井君には僕は見えていないのだろうか……。

昨日Cクラスに行ったときといい、僕はFクラスのメンバーに無視されてる気がする……

でも、取り敢えず、シリアスな空気になった。

「根本君の着ている制服がほしいんだ」

「……お前（吉井君）に何があつたんだ（あつたの）？」

僕の知る限りでは、吉井君はノーマルだったはず……はっ！

まさか今朝の木下君の着替えを見てソツチ方面に目覚めてしまったのか！

「ああ、いや、その。えーっと……」

吉井君は口ごもっている。そりゃ、いきなりカミングアウトしてしまつたんだから。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそのくらい何とかしてやるう」

「人の好みはそれぞれだよ」

「ちよつと待って、雄二はいい。いや、雄二の顔もむかつくけどそれよりも鮎川君、

君は何を想像しているんだ！」

「僕は吉井君がノーマルじゃなくても気にしないよ。あ、でも僕はノーマルだからね」

「違つっ！ それは大きな誤解だ！僕はノーマルだ！」

「別に隠さなくても……」

「だから誤解だつて『話が進まん。それだけか？』」

坂本君に遮られた。今は吉井君がノーマルかどうかなんてどうでもいい。「良くないよ」

なんか聞こえた気がするけど無視だ。今は、Bクラスに勝つことだけを考えないと。

「姫路さんを戦闘から外してほしい」

悪い予感が当たってしまったようだ。やっぱりBクラスは何かしらの手段で姫路さんを無力化しているのだろう。こうなると昨日の協定はBクラスに圧倒的に有利だ。

「理由は？」

姫路さん抜きでBクラスと戦うのは自殺行為に等しい。

「理由はいえない」

「どうしても外さないとダメか？」

「うん。どうしても」

坂本君も吉井君も引かない。おそらくだけど、姫路さんはBクラス……いや、根本君に何か弱みを握られてる。

制服に入るサイズの弱みとなると……写真、メモリー、手紙といったところか。

メモリーだと、姫路さんに中身を確認してもらおう必要がある。姫路さんは根本君と関わりが薄いはずだから、可能性は低い。姫路さんが良く知らない男子生徒に簡単についていくとも思えない。

写真は……女子の写真を持っていると根本君は変体扱いじゃないかな……

となると、手紙か。姫路さんが人の悪口を手紙に書くとは思えないから好きな人か？

ラブレター、もしくは島田さんと手紙の交換をしていたか、どっちかだな。

「頼む！ 雄二」

僕が姫路さんが握られている弱みに当たりをつけていると、吉井君が坂本君に頭を下げていた。

「……条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役わにをお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる」

「もちろんやってみせる！ 絶対に成功させるさー！」

一見根拠のない自信。だけど、吉井君には何とかしてしまいそうに感じる。

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい」

「みんなのフォローは？」

「ない。しかも教室の入り口は今の状態のままだ」

「僕が吉井君のフォローに回るよ」

根本君はBクラスの中にいるだろう。吉井君一人では成功確率は低い。

「いや、ダメだ。お前は本陣に残れ」

「どうして？」

「今の戦力でBクラスを押さえておけるとは限らない。明久が攻撃を仕掛けるまでBクラスの出入り口は死守する必要がある。お前はその為の戦力だ」

「……分かった」

坂本君にも一理ある。今出払っている戦力でBクラスを押さえ込めるかと言うと、厳しいだろう。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させる」

「それじゃ、上手くやれよ」

思考に耽り始めた吉井君を残して、坂本君はどこかに行くようだ。

「Dクラスに指示を出してくる」

「分かった」

「明久、お前は点数は低いけど、秀吉やムツリーニのようにお前にも秀でていいる部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「僕も、皆と会ってまだ時間はたっていないけど、Fクラスの皆が点数じゃ計れない何かを持っている事は分かる。僕は手伝えないけれど、吉井君の事を信じてるから」

「……雄二、鮎川君」

「うまくやれ。計画に変更はない」

僕は、坂本君と一緒に、Dクラスへ向かった。

Side Out

明久Side

雄二と鮎川君が出て行った後、僕はBクラスに奇襲を掛ける方法を考えていた。

僕に秀でていいる部分……。狭い場所での戦闘である以上、操作性や細かい動きは役に立ちそうもないし……

「あっ」

一つだけあった。秀でている、とはいえないけれど、他の人とは違う、僕だけの特徴が。

「美波！ 武藤君と君島君も、協力してくれ！」  
補給を受けるために戻ってきた三人に声を掛ける。

「どうしたの」

「何か用か」

「補給テストがあるんだけど」

この三人は既に点数を消費し、補給テストを受ける事が任務になっている。

「補給テストは中断。その代わりに、僕に協力してほしい。この戦争の鍵を握る大事な役割なんだ」

「……随分とマジな話みたいね」

「うん。ここからは冗談抜きだ」

「何をすればいいの？」

「僕と召喚獣で勝負してほしい」

あの下種野郎、目に物見せてやる！！

## 第九問 Bクラス戦終結！

バカテスト保健体育

問 人が生きていくうえで必要な五大栄養素を全て挙げなさい。

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『？たんぱく質 ？脂質 ？炭水化物 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石です。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満のときは早発月経という。また、十五歳になつても初潮がないときを遅発月経、更に十八歳になつても初潮がないときを原発性無月経といい・・・』』

教師のコメント

保険のテストは一時間前に終わりました。

第九問 Bクラス戦終結！

蓮Side

僕は、坂本君と一緒にDクラスへ指示を出しにあったあと、Fクラスに戻ってきていた。

「吉井君は、どうやってBクラスに奇襲を掛けると思う？」「坂本君に尋ねる。」

「DクラスとBクラスの間壁を召喚獣でぶっ壊して直接Bクラスなみに攻め込むつもりだろうな」

予想外の返答が返ってきた。

「そんなことしたら後で酷いことになるよ！ それに召喚獣って物体に触れられないんじゃないかな？」

「いや、明久の召喚獣は特別仕様だ。観察処分者は教師の雑用を手伝わされるんでな、召喚獣が物体に干渉できるんだ」

「そうなんだ……便利な召喚獣だね」

「いや、そうでもないぞ。物体に触れられる代わりに召喚獣が受けたダメージの何割かは、召喚者にフィードバックするからな」

「そんな使用の召喚獣で壁を壊したら、吉井君も痛いよね？」

「ああ。だがそれを含めてあいつは覚悟したんだろう。鉄人あたりにかこつてり絞られるだろうがな」

「凄い。何て男らしいんだ吉井君。自らの身を省みない策を決行するなんて……」

『Bクラス出入り口、突破されそうだ！』  
伝令が来た。試召戦争が始まったのが今朝の9時。今は3時半を過ぎていてからかなり持ったほうだと思う。

「坂本君！」

「ああ。今から俺たち本隊も出る！ Bクラスに勝手を許すな！」

『おおーっ！』

坂本君の号令で、教室に残っていた本隊が動き出す。

こちらの戦力を全てかけた、文字通り総力戦の始まりだ！

Side Out

明久Side

「おおおっ!!」

ドコンッ!

叫び声と共に壁にこぶしを叩きつける。力が強い召喚獣といっても、一撃で教室を隔てる壁を壊せるわけなく、僕の手痛みが返ってくる。

「ぐうっ!!」

「怯むな! ここを凌ぎ切れれば勝てるんだ!」

「消耗した人は下がって! 戦死はしないように!」

「坂本と本隊だ!」

教室の外から声が聞こえてきた。

姫路さんを戦闘からはずした影響は思ったより大きかったようだ。あらかじめ出ていた戦力だけではBクラスを抑えきれずに、雄二と本隊まで出てきているんだろう。まさに総力戦だ。

「雄二たちにここまでさせてるんだ……必ず成功させる!!」

Side Out

蓮Side

僕は、坂本君率いる本隊の一員として、Bクラスに援軍に来た。代表まで出てきた以上、もう隠せる戦力はない。文字通り総力戦だ。Bクラスの面々はFクラス代表の坂本君が出てきたことに驚きなが

らも、その首をしきりに狙っている。こちらも負けずに、本隊の戦力でBクラスの出入り口を押さえ込む。

「お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の入り口に群がりやがつて、暑苦しいことこの上ないつての」

「なんだ、軟弱なBクラス代表様はそろそろギブアップか？」

ドオン！

根本君が口を開くが、我らが代表坂本君は挑発で返す。

「ハア？ ギブアップするのはソツチだろ？ Fクラスはクズの集まりの上に、頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜえ？」

ドオン！！

初めて会ったときから感じていたけど、根本君の人を見下した態度は気に入らない。

挑発の意味も含んでいるだろうけれど、あの顔は本気でFクラス……いや、自分以外の人間を見下している。成績や頭の回転、策だけで人間の全てが決まるわけじゃない。

自分を過信している人は嫌いだし、今から痛い目見るよ。

「お前ら相手じゃもつたいないからな。今は休ませておくのさ」

「けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組つてのがFクラスのことならお前が今から負け組代表だな」

ドオン！！！！

「ちっ！ さっきからドンドンとうるせえな！ てめえらの仕業か

「？」

「知らねえな。人望のないお前に対する嫌がらせじゃないか？」

「けっ！ 言ってる」

だんだん、吉井君の召喚獣が壁を叩く音が強くなってきた。

「坂本君……そろそろ」

「ああ……一旦引くぞお前ら！」

「オイ！ 散々吹かしておいて逃げるのか！！」

僕は最後尾についていく。万が一Bクラスの人が追いついてきたら……

「だあああああしやああああ！！！！」

ドゴオッ！！

吉井君の叫びと共に、DクラスとBクラスを隔てていた壁が崩れ去る。

「根本恭二！ 覚悟おー！」

吉井君を筆頭に、島田さんと数名Fクラスメンバーが根本君に襲い掛かるが、

Bクラス親衛隊に阻まれて身動きが取れなくなってしまった。

「はっ！ 俺が一人でいると思ったか！ お前らの奇襲は失敗だ！

オイ、お前ら！

さっさと坂本を仕留めて来い！」

そろそろ、根本君の一方的な物言いに我慢できなくなってきたな……

… やっちゃんおつか。

「そうはさせない！ Fクラス鮎川蓮が、召喚エリア内にいるBクラス全員に数学勝負を申し込みます！」

「鮎川君！」

『何だアイツ』

『Fクラスの癖に調子乗ってんじゃねえよ』

『さっさと倒して坂本を仕留めに行くぞ！』

吉井君も驚いているけど、Bクラスの人からも色々な反応が返ってくる。

怒っている人が多いようだけど、そうやって冷静さを失うと足元をすくわれるよ。

「試験サモン召喚！」

『ぶっ潰してやる！！ 試験サモン召喚！』

『数学 Fクラス 鮎川蓮 VS Bクラス 12人  
516点 VS 平均 147点』

やっぱり文系の人が多いBクラス相手ならこの人数でも何とかなる！

『なんて点数だ！』

『あんな奴が何故Fクラスに！』

驚いてるね。だけど、召喚獣が固まっている上に動きが止まっているよ！

「衝撃波！！！」

僕は右手の剣を床に突き刺して体を固定した後、左手をBクラスの集団に向ける。

左手の腕輪が光を発し、召喚獣の左手から圧縮された空気の渦が発生する。

渦は僕の召喚獣との距離が離れていくうちに大きくなり、Bクラスの召喚獣を飲み込んだ。

「数学 Fクラス 鮎川蓮 vs Bクラス 6人

436点 vs 平均 78点

」

初見で驚いた上に、皆固まってくれたおかげでクリーンヒットした。

6人も戦死に出来たのは大きい。僕の腕輪の能力は発動する前に準備が必要だから、

同じ相手に何回も当てることが出来ない。その分威力は高いけど。

『何だ今のは!!』

『腕輪か!』

「驚いてくれてるのは嬉しいけど、隙だらけだよっ!」

混乱しているBクラスの召喚獣に向かって走る。

僕の召喚獣が接近してきたことであわてて戦闘態勢を取るけど、もう手遅れ。

一番近い人に接近し右手の剣で一閃。すぐさま隣の召喚獣に横薙ぎの一撃を入れる。

斬りかかってきた一人を左手で受け止め、上段から剣を振り下ろす。後三人。

一人がたてを構えて突進してくる。剣で打ち返すが、矢が飛んでき

て被弾してしまう。

出来た隙に二人係で攻撃してくるのを、一人を剣で受け、もう一人を左手で受けて蹴飛ばす。剣で受けているほうの召喚獣を左手で切り裂く。

「なんなんだお前は！」

この有様を見た根本君が何か言ってるけど無視。もう十分隙は作った。

根本君は吉井君と僕が立て続けに奇襲したことで窓際まで下がっている。

根本君の後ろには開け放たれた窓。四月にしては暑い天気に加え、クーラーの故障。条件は揃った。

ダンッ！

開け放たれた窓から、ロープを使ってムッツリーニと保健体育の大島先生が飛び込んでくる。

「ムッツリーニッ」「」

僕と吉井君の声が重なる。

「……Fクラス土屋康太。保健体育勝負、試験サモン召喚」

『保健体育 Fクラス 土屋康太 vs Bクラス代表 根本恭二  
441点 vs 203点』

ムツツリーニの召喚獣が根本君の召喚獣を一閃する。

「Bクラス戦は幕を閉じた。」

第十問 勝利と戦後対談・・・・・・・・のはずけどなんか喜べないものがあつた

バカテスト世界史

問 黄金のマスクで知られるエジプトの王を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『ツタンカーメン』

鮎川蓮の答え

『トウト・アंक・アメン』

教師のコメント

二人とも正解です。

鮎川君の回答を繋げて読むとツタンカーメンとなります。

土屋康太の答え

『クレオパトラ』

教師の答え

確かにクレオパトラもエジプトの女王ですが、ツタンカーメンからは  
かなり後の時代の人物です。

木下秀吉の答え

『マルセル。シュオップ』

教師のコメント

誰ですかそれは。

鮎川蓮のコメント

フランスの作家で、『黄金仮面の王』という作品を残した人物です。

この作品は後に江戸川乱歩が「黄金仮面」という作品の参考にしたと語っています。

第十問 勝利と戦後対談……のはずだけどなんか喜べないものがあつたりする。

蓮Side

ムツツリー二と大島先生の奇襲で、意外とあっけなくBクラス戦は終結した。

今、戦後対談に向けてそれぞれのクラスから代表者が集合している途中なんだけど……

「ううっ……痛いよお、痛いよお……」

吉井君が手を押さえて呻いている。召喚獣を介してとはいえ、壁を殴って壊したんだから痛みもあるし、怪我もするでしょ。

「明久も、思い切った行動に出たのう」

「ま、お前らしい作戦だな」

「でしょ、もつと褒めてもいいと思うよ」

多分木下君と坂本君が言いたいのはそのじゃないけど……

「後のことを考えず、自分の立場を追い詰める、男気あふれるおぬしらしい作戦じゃな」

吉井君を落としたのは意外にも木下君だった。

「……遠まわしにバカって言ってない？」

「いや、結構ストレートに言ってると思うけど」

「……（ガクッ）」

しまった、つい言ってしまった一言で吉井君に止めをさしてしまっただ！

「ま、それが明久の強みだからな」

バカが強みって言われる人は世界中探しても吉井君くらいだろう。

「さて、それじゃ嬉し恥し戦後対談といくか？ 負け組代表？」

「そうだね。散々汚い手まで使って負けたんだから言い訳できないね？」

「なんか鮎川君が黒い気がするんだけど……」

「奇遇じゃな、ワシもそう思っていたところじゃ……」

なんか二人が言ってるけど、こっちは根本君への怒りを抑えるのに結構必死なんだよね。

戦争って言っても、利用していいものと悪いものはあるよ。

他人の気持ちを利用するなんて最低だしね。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントするところなんだが、特別に免除してやらんこともない」

坂本君の言葉にB、Fクラス両方がざわつく。

「落ち着け、皆。俺たちの目標はAクラスだ。Bクラスがゴールじゃない」

坂本君はFクラスを制すと、根本君……もといBクラス代表の外道に向き合う。

「……条件は何だ」

「口が悪いね？ そっちは敗者なんだよ？ それにせっかくペナルティを免除してあげるって言うてるの上から目線はないんじゃない？ 散々汚い手使って負けておいてまだ自分が上だと思ってるの？ 救えない程バカだね？ もう頭腐ってんじゃない？」

「……お、落ち着け鮎川。こいつへの制裁は後回しだ」

しまった！ つい我慢できなくて。ああ！ BクラスだけじゃなくFクラスの皆も引いていらっしやる……！！

「気を取り直して……条件はお前だよ、負け組代表さん？」

「俺……だと？」

待つんだ坂本君、その発言はいささか危ない方面に取られるぞ。現にBクラスの女子の  
何人かが妄想の世界に飛び立っては顔をしかめている！

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

坂本君の言葉にばつが悪そうに下を向く外道。そりゃあんだけやってるんだ、否定できるわけがない。

それにBクラスの人も誰一人フオローしようとしない。

「ああ。そこで取引だ。Aクラスに行つて試召戦争の準備が出来ていると伝えて来い。」

ただし宣戦布告はするな。そうしたら戦争が避けられなくなる。あくまで戦争の意思とその準備が出来ていることだけ伝えるんだ」

「それだけでいいのか？」

訝しむ外道。そうだね、自分のやってきたことから考えてこのくらいで許されるわけないと思ってるらしい。その通りだよ。

「だけど、その外道はいろいろとやっちゃいけないことをやってくれたからね。」

本来ならFクラス全員と吉井君の召喚獣でミンチにするとところだけど……今回はこれで勘弁してあげるよ」

僕は女子の制服（Dクラスの人が僕に着せようとしてきた物）を取り出す。

「お前がこれを着て、さっき言ったとおりの行動をしてくれたら設備は見逃そう」

坂本君のとどめの一撃。

「ば、バカなことをいうな！ この俺がそんなふざけたことを！」

「Bクラス全員で、必ず実行させよう！」

「任せて！ 必ずやらせるから！」

「これくらいで教室を守るなら、やらない手はないな！」

Bクラスが外道を取り押さえる。フフツ、やっぱり人望はなかったね。

「やっぱり随分と評判が悪いな、お前は」

「じゃあ、早く着替えよつか（ニコツ）」

「く、来るな変態ぐふうっ」

ああっ、僕が殴ろうとしたのにBクラスの人が先にやっちゃった。

「とりあえず、黙らせました」

「お、おう……ありがとう」

「吉井君、時間がもつたないから早く着せちゃおう」

「う、うん」

僕が制服に手を書けたときに外道がうめき声を上げた。てか、目開いてるし。

「丁度良いや、どうしても気が済まなかったんだよね」

外道の胸倉を掴んで無理やり立たせると、左足を軸にして回転。外道の右あごを後ろ回し蹴りの踵で蹴り抜いた。

『……………』

なんか、皆が僕を見て固まってるけど、どうしたんだろう。

「鮎川、お前かわいい顔して案外えげつないな……」

「心外だな坂本君。これでもちゃんど手加減してるんだよ？」

本気ならハイキックの後に首投げのコンボだ。

「き、気を取り直して着替えさせようか。根本君は目覚めないようだし」

吉井君と根本君の制服を剥ぎ取り、女子の制服をあてがおうとするけど、やり方がわからない。

「これ、どうするんだろう？」

「えっ？ 鮎川君は着たことないの？」

「ないよ！ 僕は男だし女装癖もないからね！」

結局、Bクラスの子が着付けを担当してくれることになった。

Bクラスを後にし、外道の制服を探す。ポケットの中にかわいらしい封筒が入っていた。

やっぱり手紙だった。それもラブレターのほうか……もう一発殴ろうかな。

「あ。鮎川君、それは……」

「あ、はい。吉井君から返しておいて。」

「どうして？ 鮎川君が見つけたんだし、別に僕じゃなくても」

「いいから。吉井君は痛い思いをして突破口を開いてくれたんだし、このくらいの得はしてもいいんじゃない？」

昨日、吉井君と島田さんの様子を見て姫路さんは嫉妬してたみたいだし。多分……

「そういうことならもらっておくよ。ありがとう」

「気にしないで。あと、外道の制服は僕が処分しておくから」  
燃やした後に灰は撒いておこう。雑草がみるみる枯れるはずだ。

吉井君を見送った後でBクラスに戻ると……

「ほら、キリキリ歩け！」

「な、何だこの服、スカートがやけに短いぞ！」

おぞましい物体がそこにはあった……

「坂本君」

「ああ。自分で言うっておきながら吐き気がする……」

「き、貴様！ よくも俺にこんなことを！」

外道が突っかかってきた。まだ名前は知られてないみたいだね。

「あー盛り上がっているところ悪いが、このあと撮影会があるんだ。  
早くしてくれ」

「撮影会？ そっ、そんなの聞いてないぞ！」

言っていないもん。

「これ以上あれを見てたら精神が汚染されそうだし、戻ろうか」

「そうじゃの」

「……（コクコク）」

こうしてBクラス戦は本当に幕を閉じた。

後日、根本に「女装癖で変態な最低外道」という噂が立つが、本当なので気にする必要もないだろう。



第十一問 危険は意外と身近に潜んでいるって良く聞くけど自分が体験すること

バカテスト地理

問 バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい。

姫路瑞希の答え

『エトニア ラトビア エストニア』

教師のコメント

その通りです。

鮎川蓮の答え

『バーレーン ルーマニア トルコ』

教師のコメント

バ、ル、トで始まる国ではありません。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『高知 愛媛 徳島 香川』

教師のコメント

正解不正解の前に数があっていないことに違和感を覚えましょう。

第十一問 危険は意外と身近に潜んでいるって良く聞くけど自分が体験することは少ない……

蓮Side

Bクラス戦から数日。  
消費した点数の補充も終え、僕たちはAクラス戦の作戦会議をしていた。

壇上に立っているのはもちろん坂本君だ。

「まずは、皆に礼を言いたい。不可能とまで言われた試召戦争をここまで勝ちあげたのは皆のおかげだ。本当にありがとう」

坂本君からこんな言葉が出るなんて思わなかったよ。

「どうしたのさ雄二、らしくもないよ」

吉井君も同じことを思っていたらしい。ちなみにあの後本人に聞いてみたところ姫路さんとは何の進展もなかったらしい。と、いうかラブレターの相手は坂本君だと思っっているようだ。結構分かりやすい好意なのに気づかないなんて、かなり鈍感だね……

「ああ、自分でもそう思う。だがこれは偽らざる俺の本心だ」

「感謝するのはまだ早いんじゃない？」

「ああ。ここまで来た以上、Aクラスにも絶対に勝ちたい。勝って生き残るには勉強だけじゃないと大人共に見せ付けるんだ！」

『おおーっ！！』

D、Bクラスに勝利して、Fクラスの皆が自信を持っていた。きつと全ては坂本君のシナリオどおりなんだろう。

「さて、そのAクラス戦だが……一騎討ちで勝負をつけたい」

「誰が勝負するのさ？」

Aクラス、特に上位10人の成績は他の2年生とは桁が違うと聞いたし、Fクラスで太刀打ちできるとは思わないんだけど。それは皆も同じようで顔には困惑の色が見える。

「勝負するのは当然俺と翔子だ」

「バカの雄二が勝てるわけなあっ！」

ヒュンツ！（坂本君がカッターを投げる音）

トスツ！（カッターが吉井君の頭の横に刺さる音）

冗談だと思う。本気で友人の頭めがけてカッターを投げるような人

はないと思いたい。

「次は耳だ」

冗談だと信じたいっ！

「じゃが、明久の言い分ももつともじゃぞ。雄二と霧島が勝負して勝てると思えん」

友達の命が間一髪助かったという状況なのに何故か落ち着いている木下君……

いや、木下君の意見には賛成だよ。Fクラスで一番成績がいいといつても所詮はFクラス。

Aクラス代表、つまり学年主席の霧島さんとの差は天地ほども離れているだろう。

「まあ、その通りだ。まともやって勝てるとは思っていないが、それはDクラスBクラスのとときも同じだったろう？　だが俺たちはその戦いに勝った。今回も同じだ。

俺は翔子に勝ち、Aクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない……皆俺を信じてくれ。

過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる！」

『『『『おおーっ！』『』』』

坂本君の一言で皆の指揮が更に上がった。

やはり上位クラス2クラスに策略で勝ってきたことが大きいらしい。

「で？　まともやり合って勝ち目がないって自覚してるらしいけど、具体的にはどうするの？」

「ああ。具体的には……フィールドを限定する。内容は日本史の限定テスト勝負。」

小学生レベルの問題で100点満点の上限ありだ！！」

「それなら両方100点でしょ？」

「そうだよ雄二。同点だったら延長戦になるし、問題のレベルも上げられちゃうよ？」

「おいおい。お前らあんまり俺をなめるなよ？ 幾らなんでもそこまで運に頼りきった勝負をするつもりはない」

坂本君がこう言っつてことは、何かしらの秘策があると考えていい。一番確実なのは霧島さんの集中力を乱すとか、かな。

「雄二は霧島さんの集中力を乱す方法を知ってるの？」

「いや、翔子にとつて小学生レベルの問題なんて集中してなくても余裕で100点だろう」

「じゃあどうするのよ？」

「集中してなくても100点つて、要するに勝ち目がないってことだからね？」

集中しなくても満点が取れる相手なんて勝ち目がないにも程がある。

「いや、一問だけアイツが間違える問題がある」

「そんな問題があるの？」

「ああ。その問題とは……大化の改新！」

「大化の改新なんて小学校で習ったっけ？」

「そうじゃの。内容までは習っておらんかった気がするが」

「いや、内容を答えるほど掘り下げた問題じゃない。もっと簡単な問題だ」

「簡単……というと何年に起こった、とかかの？」

「ああ。そうだ」

大化の改新は「無事故の改新」だったから645年だ。

「大化の改新というと、645年かの？」

「ああ。こんな問題は明久でも間違えない」

坂本君が言った瞬間に吉井君が顔を背けたのを僕は見逃していない。吉井君が小学生レベルの問題も答えられないとは思わなかったけど。

「だが翔子はこれを必ず間違える」

「あの……坂本君は霧島さんと仲がいいんですか？」  
今まで口を開かなかった姫路さんが坂本君に聞く。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員、狙えっ！！」

吉井君の号令でFクラス男子全員（僕と木下君を除く）が上靴を坂本君に向けて構える。

「い、いきなりどうしたの皆？」

「鮎川君、止めないでくれ！ 僕はこの男の敵を始末しないといけないんだ！」

「鮎川よ、止めるだけ無駄じゃ。こやつらはこうなるとなかなか止まらんからの」

僕か？ 僕がおかしいのか？ というかFクラスに本来いないはずの姫路さんはどうしてこの空気になじんじゃってるの？ 君に何があつたんだ！

「お、お前ら俺と翔子には何も」

「黙れ男の敵！ 須川君、靴下はまだ早い。それは押さえ込んだ後に口に押し込むものだ」

「はい！ 隊長！」

「吉井君。吉井君は霧島さんみたいな人が好きなんですか？」

姫路さん、やっぱり好きな人の好みは気になるよね。

ただ、微妙に殺気がにじみ出てるのが気になるけど……

吉井君、ここは彼女の気持ちに気づいて……

「うん。美人だし」

アウトオ！ 吉井君、その答えは引き金を引くことになるぞ！

「ちょっと、姫路さん？ どうして僕に向かって戦闘態勢をとるの？ 美波もどうして

僕に向かって教卓なんて危ないものを投げようとしてるのさ？」

やばい。吉井君の一言で恋する乙女二人が臨戦態勢だ。

「と、とにかく。俺はアイツに昔間違つて嘘の年号を教えたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。あいつが今年主席にいるのもその影響が大きい。だから俺たちはそれを利用して翔子に勝つ。そうすれば俺たちの机は……」  
「……システムデスクだ！」「……」

吉井君の危機の傍らでは皆のテンションが最高潮を迎えていた。

「今から宣戦布告に行くぞ。明久とムッツリーニも付いて来い」

「あ、ウチも行くわ」

「私も行きますっ」

「じゃあ僕も行こうかな。Aクラスにも興味があるし」

「分かった。取り敢えず早く行くぞ」

所変わってAクラス

僕たちは試召戦争の交渉のためにAクラスに赴いた。

「ナニコレ？ ここは外国のホテルかなんかなの？」

Aクラスに付いた僕の第一声がこれだった。照明はシャンデリア。

机はシステムデスクだし、  
リクライニングシートと個人エアコンまで付いている。  
日本の学校でこれ以上に設備を持つ学校はないだろう……。

「あら、何の用？」

目の前には木下君女装ver. が立っていた。

「あれ？ 木下君いつの間にかクラスに？ それに女装なんてして  
るから男として見られないんだよ？」

どうしてだろう、目の前の木下君がうつむいて震えてるんだけど……

「鮎川よ、ワシはここじゃ」

あれ？ じゃあ、僕の目の前の人は……

「私はそいつの姉よ！」

「うわああ！ ご、ごめんなさいっ！」

「どいつもこいつも秀吉ばかり……許さないわ！」

「ちょ、き、木下さん？ 人間の身体構造上その関節はソッチの  
方向には曲がらなあああああああああああああああああ  
あああっ！……！！！」

意図せずに木下さんの逆鱗に触れてしまった僕はAクラスとの交渉  
を終えた皆が助けしてくれるまで木下さんのサブミッションを喰らい  
続けたんだ……

Side Out

No Side

蓮が優子に関節技による説教（拷問）を受けているころ。雄二たち

Fクラスの面々は  
Aクラスとの交渉のテーブルについていた。

「で？ 今日は何の用かな？」

Aクラスの交渉役は学年次席（瑞希が振り分け試験を途中退席したため）の久保利光。

「ああ。Fクラス代表として一騎討ちを申し込みに来た」

「その要求を呑むことでの僕らのメリットは？」

「昨日、Bクラスから使者が来たはずだ」

「あの女装した……失礼。確かに来たがBクラスはFクラスとの試召戦争に敗れて

3ヶ月間は宣戦布告が出来なくなっているはずじゃないかい？」

「いや、あの戦争は公式には和平交渉にて終結、となっている」

「それは脅迫かい？」

「まさか。お願いをしているだけさ」

「だが、一騎討ちを受け入れることは出来ない」

「安心しろ。Fクラスからは俺が出る」

「しかし……『受けてもいい』代表？」

Aクラス代表霧島翔子が交渉の席に加わる。殆ど気配を絶って近づいたため、Fクラスにメンバーは驚いているようだ。

「雄二の提案を受けてもいい」

「代表がそういうならば良いだろう。ただし、1対1ではなく代表者による5対5にしてもらいたい」

「ああ。それで良い。だが、勝負内容はこっちで決めさせてもらおうぜ？」

「それは……」

「そっちの方が上位クラスなんだ。そのくらいのハンデはあっていいだろう？」

「なら、全5回戦のうち3回Fクラスが、2回Aクラスが教科を決める、ていうのはどうだい？」

「それでいい。じゃあ、10時からで良いな？」

「ああ。構わないよ」

「……待つて。Aクラス代表として提案がある」

代表戦の勝負内容が決まったところで翔子が口を挟んだ。

「なんだ？」

「……負けたほうが勝った方の言う事をなんでも一つ聞く」

「ちよつと、代ひよ『ああ。別にいいぜ』」

「ちよつと雄二！ まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

雄二が提案を受け入れると、翔子が何を言うと思ったのか明久が雄二を止めにかかる。

「大丈夫だ。姫路に迷惑は掛けない」

「もう、良いかな？」

「ああ。それじゃあ、俺たちは帰るぜ」

「雄二、さつきから鮎川が姉上の折檻を受けて折るのじゃが」

「あ？ それは自業自得だろ？」

「いや、そうなのじゃが、あれはさすがに拙いというか……」

秀吉に言われFクラスメンバーが蓮のほうを見ると、蓮は優子にサブミッションを掛けられながら、白目を剥いている。

「ちよ、ちよつと待つてくれ木下さん！ 鮎川は代表戦に出てもらわなきゃいけないんだ。

だからその辺でやめてくれ！」

雄二が慌てて優子を止め、蓮は一命を取り留めた。

Side Out

蓮 Side

「うう……ありがとう坂本君……死んじゃうかと思ったよ……」

僕は坂本君のおかげで命からがらAクラスを脱出することが出来た。「いや、鮎川が『蓮でいいよ』、蓮がそこまで感謝するようなことはしていない」

「いや、坂本君が『雄二で良い』、雄二が来てくれなかったらきつとあのまま殺されてたよ」

「ねえ秀吉。秀吉のお姉さんってそんなに凶暴な人なの？」

「いや、普段はそうでもないんじゃないが……」

木下君はそう言っているけど、僕は実際に殺されかけたよ？

「じゃあ、結局5対5の代表戦になったんだね？」

僕は雄二からAクラスとの交渉の結果を聞いていた。

「一騎討ちじゃなくても、5対5の代表者戦に持っていったのは大きい。」

クラス同士の対決じゃ絶対に勝てないからね。

「ああ。お前にも出てもらう予定だから準備しておけよ」

「うん。僕と、明久（名前で呼ぶことにした）、ムッツリーニと姫路さん、雄二の5人だね？」

「え？ 僕も出るの？」

名前を出された明久が不思議そうにしている。

「明久は召喚獣の扱いが上手いし、Aクラス相手でも点数によって

は勝てるかもよ？」

「ああ。俺はお前を信頼している」

「そ、そうなんだ……」

どうしたんだろう？ 明久は面と向かってほめられたことがないのかな？

打ち合わせをしているうちに約束の時間が迫ってきた。

「よし、行くぞお前ら！ 最終決戦だ！」

「「「「「おおーっ！」「」「」」

いよいよAクラス戦の始まりだ！

## 第十二問 英語と実技とAクラス戦（前書き）

一日あいてしまったことをお詫びします。

今日、PVが3000を突破したことを確認しました。  
ちよつとでもこの駄文を覗いてくださった方全員に感謝しています。

## 第十二問 英語と実技とAクラス戦

バカテスト化学

問 周期表16族の元素を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『O……酸素 S……硫黄 Se……セレン Te……テルル P  
o……ポロニウム』

教師のコメント

正解です。元素記号だけでなく元素の名前まで答えられるとは思  
いませんでした。

吉井明久の答え

『水兵リーベ僕の船』

教師のコメント

君は周期表の意味を分かっていますか？

土屋康太の答え

『O、S、Se、Te、Po』

教師のコメント

正解です。土屋君、どうしたんですか？

鮎川蓮のコメント

16族の語呂合わせを考えればムツツリーニが覚えているのは当然。

第十二問 英語と実技とAクラス戦

蓮Side

僕たちは再びAクラスを尋ねた。もちろん今回はFクラス全員だ。

「それでは、試召戦争を開始します」

開戦の合図を出したのはAクラス担任で学年主任でもある高橋洋子先生。

美人で才女……らしい。

「アタシが出るわ」

Aクラスの一人目は木下優子さん。僕はさっき殺されかけたから、

苦手って言うか、  
トラウマが……。

雄二の話では一回戦は明久が「蓮、行け」て、ええええええええええええええつ！！！！！！

「待つて、話が違うよ雄二！一回戦は明久って言ったじゃないか！」

「大丈夫だ。死んで来い」

「それ大丈夫じゃないから！死刑宣告だよね！」

人が殺されそうになったの知ってるくせに何てことを言っんだ！

「どうしました？早く出てください」

くっ、仕方がない。

「ぼ、僕が出ます……」

「あら、さつきはどうも」

木下さんからいきなりの先制攻撃。こっちのトラウマをこれでもかというほど刺激してくる。

「だいたい、Fクラス程度がアタシ達に勝てるわけないわ」

「どうして？少なくとも僕たちはDクラスとBクラスに勝ってここまで来たんだけど」

「フン。努力もしないで成績上がるわけないわ」

完全にFクラスを見下している。木下さんをはじめ、Aクラスの人たちは成績も良いし、それに見合うだけの努力もしてきたんだろう。

ただ、成績だけで人は測れない。特にFクラスは、ね。

「じゃあ、木下さんが一番努力した教科で勝負しようよ。努力して、良い成績とってるんだよね？それを証明してよ」

「ハ？ 何言ってるのよ？ そんな条件じゃ勝てるわけないわ」  
まだ、バカにしている木下さん。だけど僕だって勝算なしにこんな挑発してるわけじゃない。

「そっか。努力した教科で負けるってことは努力が意味なかったって認めることだもんね。

怖いよね？」

ちよつと溜めああとに口角を上げて言い放つ。

結構分かりやすい挑発なんだけど、分かりやすいからこそ効果も高い。

「何ですって！ いいわ。そこまで言うなら英語で勝負よ！」

「後悔しないでよ。Fクラス鮎川蓮がAクラス木下優子さんに英語勝負を申し込みます」

「Fクラスの分際でアタシにけんか売ったこと後悔させてあげるわ！ 試験召喚」

木下さんは召喚獣を呼び出す。

西洋風の鎧を纏ってランスを構えている。見るからに強そうだ。

「試験召喚！」

僕も召喚獣を呼び出す。点数表示が終わる前に木下さんが突進してきた。

「消えなさいっ！」

スピードそのままでランスを突き出してくる。並みの召喚獣ならこの一撃で決められる。

だけど、僕にこんな単調な攻撃は通じない！

ガキンッ！

ランスを右手の剣で受け、滑らせるように勢いを逃がす。そして近づいてきた木下さんの召喚獣の頭を左手で掴む。

「なっ！ 離さないよ！」

「離せつて言われて離すと思う？ 『衝撃波』」

右手の剣を床に突き刺し腕輪を発動する。反動が強い代わりに、複数の召喚獣を一度に葬れるほどの威力を持つ攻撃を、

木下さんの召喚獣はゼロ距離で、しかも頭に受ける。

そのまま、召喚獣の頭を吹飛ばし、勝負は決まった。ここまで10秒足らず。

『英語 Fクラス 鮎川蓮 vs Aクラス 木下優子

545点 vs 392点

』

勝負が付いてから、ようやく二人の点数が表示される。

僕は腕輪を一回使ってるから本来の点数 - 80点だ。

木下さんも400点近かった。さすがに一番努力したってだけはあるね。

だけど、英語は僕も負けられない教科なんだよね。

『何だあの点数は』

『500点台だと！』

『なんであんな生徒がFクラスに』

『あのかわいい子が天才だったなんて』

『蓮ちゃん愛してる！』

僕の点数に、Aクラスだけじゃなく、Fクラスの皆も驚いている。けど、最後の人には一度お話しする必要があるそうだ。

「何だよ。どうして……」

木下さんは、よほど悔しかったのか涙目になっている。

「木下さんが自分を過信して他人を見下していたからだよ。」

どんなに優秀でも、成績が良くても人を否定して言い訳じゃないんだ」

「くっ……」

言いたいことは言った。ここからは木下さんが自分で考えることだ。

「蓮！ 英語もすごかったんだね！」

「ああ。俺も驚いたぞ。あそこまで高い点数をとっていたとはな」

「僕にとって、英語は母国語みたいなものなんだよね。だからその辺の教師よりできる」

自信はあるよ」

「じゃあ、運が良かったってこと？」

「いや。雄二じゃないけど、僕も運任せであんな挑発はしないよ」

「勝算があつたということかの？」

「そう。英語は積み上げ教科だからね。日々こつこつと勉強しないと出来るようにはならない。僕にとってはそれが日本語だったんだけどね」

一番努力した、つまり最も時間を掛けた教科は何かと聞かれたら大抵の人は英語か数学と

答える。それが分かった上で挑発したんだよ。

「しかし、蓮が勝つて来るとは思わなかったぞ。良くやった」

「へえ〜。やっぱり僕は捨て駒だったんだ」

試合前の態度で分かっていたけど、面と向かって言われると凹む。

「秀吉？」

あれ、木下さん？ 何のようだろう。

「なんじゃ姉上？」

「忘れてただけけど、Cクラスの小山さんって知ってる？」

秀吉の命が危ない気がするの僕だけだろうか？

「はて？ 誰じゃそれは？」

秀吉が言った途端木下さんから殺気が！

「ふ〜ん、ちよつと来てくれるかしら」

「なんじゃ姉上。何故ワシの腕を掴むのじゃ？」

「あんたCクラスで何を言ったのかしら？ どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしたことになってるのかしら？」

「はっはっは、それはワシなりに姉上の本性を推測して……ちが、姉上！ ワシの関節は

そっちには曲がらな……ギャアアアアツ！！」

試合に負けて落ち込みながらもしつかりと恨みを晴らしに来るとは……木下さん恐るべし

「それでは、次鋒戦を始めます」

Aクラスからは佐藤美穂さん。Fクラスからは我らが観察処分者明久が出る。

教科は物理が選択された。

「明久、やってこい。大丈夫だ、俺はお前を信じてる」

「フ……それは僕に本気を出させてこと？」

「ああ。もう隠さなくていいだろう。お前の本気を見せてやれ」

な、なんだって？ 明久はまだ本気を出していなかったってことか？ もし今までの成績がこの一戦のための演技だとしたら……

「まさか貴方は？」

「そう。僕は今まで本気なんて出しちゃいない。僕本当は……」

明久の言葉に両クラスの生徒が息を呑む。

「左利きなんだ」

『物理 Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 佐藤美穂

62点 VS 389点

』

勝負は一瞬でついた。

点数差は6倍以上か……操作技術で勝てる点差じゃないな。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

明久は島田さんに関節技を喰らっている。

「み、美波、ただでさえフィードバックで苦しんでるのに更に殴るのはやめて！」

「島田さん！ それ以上やったら明久が死んじゃうよ！ 君は自分の好きなhゴフウ」

何故だろう。明久を助けようとしたはずなのに僕がボロボロにされている……

「それでは三回戦を始めます」

「……（スクツ）」

Fクラスからはムツツリーニ。保健体育では負け知らずの猛者。

「じゃあAクラスからはボクが出るよ」

そういつて立ち上がったのは黄緑色のショートヘアの女の子。

こういつては失礼かもしれないけれど、男物の服を着たら男子で通りそうだ。

「教科はなんにしますか？」

「……保健体育」

ムツツリーニが教科を選択する。もちろん保健体育。

ここでムツツリーニが保健体育を選ばないなんて天地がひっくり返ってもありえないと思う。

「ボクは工藤愛子。君、保健体育が得意なんだってね。でも僕も得意なんだよ。君と違って……実技で、ね」

フッシャーアアアア  
「……実技」

「ムツツリーニ！」

工藤さんの言葉でムツツリーニが鼻から赤い噴水を出して倒れる。けど、さっきの言葉にそんな要素あつたっけ？

「吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、僕が教えてあげようか？ もちろん実技で、ね」

「フ……望むところ」

「吉井君にはそんな機会一生ないから必要ありません！」

「そうよ。アキには必要ないわ！」

明久が死ぬほど悲しい目をしているんだけど、別に一生スポーツやらない訳ないんだから本気にしなくてもいいのに。

「じゃあ、鮎川君……だっけ？ 君はどう？」

「特に苦手なスポーツもないのでいいです」

『え？ スポーツ？』

あれ？ 僕なんか変なこと言った？

「えっと……君は実技ってなんだと思ってるの？」

「ソフトボールとかサッカーとか？」

「君、保健体育の点数何点？」

な、何故そんなことを聞いて来るんだ！ 保健体育は……

「に、二十点くらい……かな」

嘘です。本当は16点です。

「そうなんだ……ゴメンネ」

どうして？ 何で僕謝られたの？

「蓮……お前みたいなの、嫌いじゃないよ」

本当に皆どうしたんだろう。

「そっか……じゃあ、ムツツリー二君、二人で鮎川君に保健体育を教えてあげようか？」

「……さ、3……」（ブツシャアアア）」

「どうして？ どうしてそこで倒れるのムツツリー二！」

鼻血なのに出血量が半端ないことになってるんですけど！

「ムツツリー二！」

僕と明久が倒れたムツツリー二に駆け寄る。

「ムツツリー二しっかりして！」

「あ、明久……」

「しゃべらないで！」

「……後は、頼む（バタツ）」

「ムツツリーニイイイイイイ」

命の危機のはずなのに、コメディ臭がする……

「どうしました？ 早く召喚してください」

高橋先生！ ムツツリー二が作っている血溜りが見えないんですか！

「うちの不戦敗でいい」

「分かりました」

坂本君が敗北宣言をする。それを受けて高橋先生がキーボードに何か打ち込む。

『生命活動 Fクラス 土屋康太 V S Aクラス 工藤愛子

DEAD V S WIN

』

突っ込まない。もう突っ込まないからね！

「それでは四回戦を始めます」

「私が行きます」

Fクラスは姫路さんAクラスからは、いかにも知的な雰囲気纏っている眼鏡の男子が出てきた。

「ここが正念場だぞ」

雄二がつぶやく。

「どうして？」

「Aクラスから出てきたのは学年次席の久保だ。今までの成績は姫路とたいした差はない」

「どっちが勝ってもおかしくないってこと？」

「そうだ」

「教科はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「まずいな。総合科目は点数がそのまま戦闘力になる。分が悪いか」

「どうしてさ。姫路さんだって元学年次席でしょ？ さつき雄二が言ったみたいにたいした差はないよ」

「だいたいかな」

姫路さんと久保君が召喚して……そして勝負は一瞬で着いた。

『総合科目 Fクラス 姫路瑞希 vs Aクラス 久保利光

4409点 vs 3998点

』

「何だあの点数は？」

「霧島翔子に匹敵するぞ！」

「すごいよ姫路さん！」

「驚いたよ。いつの間にそんなに強くなったんだい？」

「私、このクラスが好きなんです」

「Fクラスがかい？」

「はい。人のために一生懸命に慣れるこのクラスが。私の好きな人のいるこのクラスが、好きなんです」

姫路さんが勝って、2対2。全ては次の最終戦で決着がつく。

「それでは、最終戦を始めます」

第十三問 世の中には理不尽なことがあふれている、なんていうけれど自分が体

バカテスト地理

問 日本国土で最南端の島の名前を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『沖ノ鳥島』

教師のコメント

正解です。最東端の『南鳥島』と間違える人が多いのですが、姫路さんは引っかけりませんでしたね。

木下秀吉の答え

『南鳥島』

教師のコメント

見事に引っかけりましたね。

吉井明久の答え

『与那国島』

教師のコメント

それは最西端です。沖縄県ということ、南にあるというイメージは分かります。

吉井君にしてはまともな間違え方で驚いています。

鮎川蓮の答え

『竹島』

教師のコメント

……君からこんな救いようのない答えが出るとは思いませんでした。

第十三問 世の中には理不尽なことがあふれている、なんていうけれど自分が体験すると自分だけ不幸なんじゃないかって思える。

蓮 Side

「それでは、最終戦を始めます」

高橋先生の号令で、最終戦の幕が開いた。

Aクラスの代表者は学年主席の霧島翔子さん。

Fクラスからは、もちろん我らが代表坂本雄二だ。

「ついに始まるね」

「うん。あの問題が出るといいけど……」

「確かに、その問題が出なければ勝てぬからのう」

雄二は運任せの勝負はしない、って言うてたけどこの勝負も案外運負かせなのかもしれない。

「教科はどうしますか？」

「教科は限定テスト対決。内容は歴史の小学生レベルで100点満点の上限ありだ」

雄二が勝負内容を伝えるとあらかじめ聞かされていないAクラスはざわつく。

小学生レベルならば両方100点を取って当たり前。集中力の精神力の勝負になる。

「分かりました。それでは問題を用意しますので付いて来て下さい」  
高橋先生について雄二と霧島さんが視聴覚室へと向かう。

視聴覚室の様子と、テストの問題はAクラスのプラズマディスプレイに表示されるようになっていく。

テストは進み、年号を答える問題が表示される。

関が原、応仁の乱、鎌倉幕府……大化の改新、あった！

「あつたぞ！」

「うん」

「僕たちの勝ちだ！」

「これで僕たちの机は……」

『『『システムデスクだ!!』』』』

何度目か分からないFクラスの合唱。

雄二の作戦通りに事は運んだ。

あとは、結果を待つだけだ。

『歴史限定テスト対決 Aクラス代表 霧島翔子

97点』

「やった! Aクラス代表は100点を逃したぞ!」

「そんな……代表が……」

霧島さんの点数が表示されると、Fクラスは雄二の思惑通りに霧島さんが満点を逃したので

歓喜に沸く。対するAクラスはあきらかに落ち込んでおり、中には絶望したかのように

ひざを着く生徒の姿もある。

『Fクラス代表 坂本雄二

53点』

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった……

## Aクラス教室

「何かいい訳はある? 雄二」

「……雄二、私の勝ち」

「……………殺せ」

「いい覚悟だ! 殺してやる! 歯を食いしばれ!」

「落ち着いてください吉井君!」

「どうして止めるんだ姫路さん！ コイツには僕らの期待と信頼を裏切った罰が必要なんだ！」

「で、雄二、この点数なんだけど……」

「いかにも俺の全力だ」

「このアホがああああ！！」

明久が怒り狂ってる。まあ僕も同じ気持ちだけど。

「アキ、落ち着きなさい。アンタだったら30点も取れてないでしようが！」

「それについては否定しない！！」

「いや、出来ない、の間違いじゃないかな？」

「だったら、坂本君を責めちゃだめです！」

「くっ、何で止めるんだ！ このゴリラには喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに」

「それは体罰じゃなくて処刑です！」

「ねえ。僕はあのテストでも少なくとも雄二よりは点数取れるし、代表戦でも勝ったから、

雄二にお仕置きしてもいいかな？」

そろそろ我慢の限界だ。

「そ、それは……」

「いけ、蓮！ そのゴリラに人の信頼を裏切った罰を与えるんだ！」  
「りよ〜か〜い」

雄二？ ちょっと寝てもらおうよ？

「鮎川君、止めなさい！！」

「どうして止めるんだ木下さん！ コイツにはお仕置きが……て、木下さん？」

「どうしてアタシだってわかった途端いやな顔するのよ」

「そりゃ、殺されかけたあああああああああああああああああああああ  
あああああっ！！」

僕は再び地獄を見た。

Side Out

No Side

優子による蓮へのお仕置き（折檻）が終わり、Fクラスの騒ぎも一応収集した。

「……雄二、約束」

「ああ。好きにしろ」

「どうしよう！ 姫路さんの貞操が危ない！」

危ないといいながらカメラを準備するムツツリーニとレフ版を持つ明久。

なんとも欲望に忠実な二人である。

「……雄二、私と付き合って」

「……え？」「……」

空気が凍った。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと雄二が好き」

「その話は何度も断っただろう？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて興味ない」

「拒否権は？」

「……ない。だから今からデートに行く」

「ぐあ！ 離せ！ やっぱり約束はなかったことに……」

翔子は雄二の首を掴んで持ち去ってしまった。

皆が呆然としている中、Aクラスの鉄人こと西村教諭が入ってきた。  
「さて、Fクラスの諸君。お遊びの時間は終わりだ。これから我がFクラスについての説明を始めようか」

「え？ 我が？」

「おめでとう。お前らの試召戦争敗北のおかげで、Fクラスの担任が福原先生から俺に代わるそうだ。これから一年死に物狂いで勉強できるぞ！」

『な、なんだって』

当然のことながら、Fクラスは悲鳴を上げている。

「いいか、お前たちは良くやった。しかし、「学力が全てではない」といつても、人生をわたっていく中でそれは大きな武器となる。全てではないからといって蔑ろにしている理由にはならん」  
もつともである。

「吉井に坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ開校以来の観察処分者と、A級戦犯だからな」

「そうは行きませんよ。なんとしても監視の目をかいくぐって今までどおりの楽しい学園生活を送ってやる！」

「……お前らには悔い改めるといふ発想はないのか？」  
あつたら何時までも学園位置の問題児ではいられまい。

「とりあえず、明日から授業と別に補習の時間を二時間設けてやる」  
う

Fクラスが悲鳴を上げる。

「さあ、アキ、ウチらもクレープ食べに行きましょう？」

「え？ それは週末のはずじゃ……」

「だめですよ！ 吉井君は私と映画を見に行くんです！」

「ちよつと待って！ それは話題にすら上がっていないよ！」

「はい。今決めました！」

「いやー！ 僕の食費がー」

その傍から見ればほほえましい光景を見ている蓮に後ろから接近する影が。

「映画か……それもいいわね」

「待つんだ木下さん。なぜに僕を見ながらそんなことを？」

「そりゃ一緒に……」

「待ってくれ！ 僕は試召戦争で木下さんに勝った筈だ！ 奢らせるいわれはない！」

「あら？ 約束はAクラスとFクラスの試召戦争の結果よ？ 個人での勝負の結果は関係ないわ。さあ、敗者は勝者に従いなさい」

「理不尽だあああああつ……！！」

その場にいたAクラス全員が思った。「ああ。これは復讐だ」と。

「そうね……確かに鮎川君はアタシに勝ったから……暇なときの荷物もちで勘弁してあげるわ」

「それは勘弁したとは言わないよ！」

「さあね？ じゃあ、今度暇なときに連絡するから。覚悟するときなさいよ」

「そんな……」

この戦争で一番割を食ったのは実は彼かもしれない。なぜなら……

「ただ今から異端審問会を開始する」

「え？ どうして？」

「被告鮎川蓮（このものを甲とする）はAクラス木下優子「このものをヘルソルジャーとする」に対し、我らが教示に反する行為を行った可能性がある。

甲はヘルソルジャーに対し、脅迫、およびわいせつ行為をしていたところを目撃

現在に至る」

「ええい、御託はいいから結論を述べたまえ！」

「楽しそうに話していた後、デートの約束をしていたのでうらやましいであります！」

「えええ〜ちよっと待ってよ！ 僕はデートの約束なんてした覚えがないよ！」

「判決、死刑！」

「ぼ、僕の話聞いてくれ〜」

「に、西村先生、明日からといわず今日やりましょう個人でいいですから！」

思い立ったが仏滅です！」

「吉日だ、バカ。お前がやる気になったのは嬉しいことだが無理することは無い。」

今日だけは存分に遊ぶといい」

「おのれ鉄人！ 僕が苦境にいると分かった上での狼藉だな！」

ならば、卒業式、伝説の木下で釘バットを持ってお前を待っ！」

「斬新な告白だな、オイ」

「さあ、アキ行くわよ」

「吉井君はどの映画が見たいですか？」

「うわあああー僕の食費がー！ 生活費がー！」

二人の悲痛な叫びがAクラスに木霊した。

ちなみに、襲撃してきたFFF団44名を3分で沈めることとなった蓮は、

その光景を目撃していたAクラスの面々から畏怖の念を抱かれることとなるのだが

これはまた別のお話。

## 第十四問 その場のノリは結構大切

バカテスト英語

問 「私は何か悪いことが起きるのを知っている」を和訳しなさい。

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『I know that something bad will occur.』

教師のコメント

正解です。君達には簡単でしたかね。

吉井明久の答え

『I don't want to back my sister.』

教師のコメント

君の願望は聞いていません。それにしても、姉や、妹に帰ってきてほしくないとはどういうことでしょうか？

坂本雄二の答え

『I know that Shoko come soon.』

教師のコメント

霧島さんがやってくるのが悪いこととはむしろいいことじゃないか？

鮎川蓮のコメント

もう二人の英語が間違ってることにはノータッチなんですね……。

第十四問 その場のノリは結構大切

蓮Side

Aクラスとの試召戦争が終結して、僕は家路についていた。だいたい、FFF団ってのはなんなんだろうね。あんなに理不尽な襲撃を受けたのは久しぶりだよ。

「明久君！ これを見ましよう！」

なんか姫路さんの声が聞こえる。

「……じゃあ、僕はいいから二人だけで行って来なよ」

明久、食費がピンチなのは分かっているけど、二人は“君と一緒に”映画を見に来てるんだからその提案は……

「え〜、じゃあアニメにする？」

「いやそうじゃなくて……」

覚悟を決める、明久。僕みたいにトラウマのある相手に理不尽な条件突きつけられてないだけでしたよ……

「アタシが何時理不尽な条件突きつけたかしら？」  
え？

「き、木下さん？ まさか僕の心を読んだの？」

「声に出てたわよ」  
しまった。

「で？ アタシが何時アンタに理不尽な条件突きつけたのよ」

「いや、普通トラウマのある相手からいわれのない荷物もち宣告を受けるのは十分理不尽だと思うけど……」

「ふーん……」

怖い！ ちょっと口角が上がっているところとか正に悪魔だよ！

「明久、諦める」

うん？ なんかに聞きなれた声が。

「男とは、無力だ……」

Side Out

明久Side

「男とは、無力だ……」

「雄二？」

僕の目の前に、手枷をはめられている雄二と、その手枷から伸びる鎖を握っている霧島さんが現れた。

まるでゴリラとその調教師だ。

「おい明久。今なんか失礼なこと考えなかったか？」

「き、気のせいだよ」

このゴリラは侮れない。

「で？ 雄二は何しに来たの？」

「翔子にデートに連行されてきたんだ……」

「……雄二、何が見たい？」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ、地獄の黙示録完全版」

「おい、それ3時間23分もあるぞ！」

「……2回見る」

「一日の授業より長いじゃねえか！」

「……授業の間雄二に合えない分のう・め・あ・わ・せ」

「くっ、帰る」

「……今日は、帰さない」

「おい、まて翔子それは、あ、ば、ぎゃあああああ！」

逃げ出そうとした雄二が霧島さんのスタンガンによって眠らされた

……

「……学生二枚、二回分」

「はい学生一枚気絶した学生一枚無駄に二回分ですね」

「いいの？ 気絶した学生はスルーなの？」

「仲のいいカップルですね」

「あこがれるよね」

姫路さん、美波、あのカップルはちょっと違う気がする……

「覚悟を決める、明久」

僕の後ろからまた聞きなれた声が……

「男とは、搾取されるものだ……」

「蓮、止めてよ！ 今の状況の僕にとどめの一言なんて！」

「いや、明久は別に搾取されてないだろ」

「何処をどう見たらそうなるのさ！ 明らか僕の財布がピンチじゃないか！」

「いや、お前はまだそれなりに自分の意思でここにいるし、なにより前々から約束していたじゃないか！ 僕なんて……ただその場のノリ的な要素でこの悪魔に

搾取されようとしているんだぞ！」

「誰が悪魔って？」

「あ、いやその別に木下さんのことを悪魔って言った訳じゃあああああああああ！！」

断末魔が響き渡った。

「き、木下さん。どうして蓮と一緒にいるの？」

「ふえ？ い、いやえつと……そうノリよノリ！ 別に一緒に帰ろうとあとをつけたわけじゃ……」

「えつと、後半よく聞こえなかったんだけど？」

「別に何も言っていないわよ！」

こ、恐い……

Aクラスでの蓮の悲劇を目撃してるだけあって恐怖五割増だ。

「木下さんは何の映画を見るんですか？」

「え？ そうね、あんまり考えずにきちやっただから特に決めてないわ。」

せつかくだから姫路さんや、吉井君と同じ映画にしましょうか」  
木下さん。君が同意を求めている相手は既に戦闘不能だよ……

「木下さんさえ良ければ一緒に見ませんか？」

「そうね。大勢で見たほうが楽しいし」

「そう？ それじゃあ一緒に……」

「待つんだ。そもそも僕は映画を見ることすら承認していない！」

「

蓮も復活したみたいだ。」

「ちよつとアキ、これは約束でしょ？」

「約束は週末だったはずだろ？ それにその約束の中に映画なんて単語は一度も出てきていない！」

「そうだ！ 明久は自業自得だからともかく、僕はただ映画館の前にいただけで

勝手につれてこられたんだ！ 開放を要求する！」

「蓮！ 今僕を売ろうとしたね！」

「売ろうと何てしてない。僕は事実を言ったまでだ」

「ほら。鮎川だってこういつてるんだから。行くわよ、アキ」

「ぼ、僕の………食費が……」

「さあ。アタシ達も行くわよ！」

「ちよ、木下さん！ どうして僕まで！」

「嫌なの？」

「もちろんいやあああああああああああああああああああ！

！……」

僕を追いかけるように、二度目の断末魔が響き渡った。

第十五話 フィクションの中の出来事で、リアルでも起こってほしいことは起

バカテスト日本史

問 次の（ ）に正しい年号を入れなさい。

『（ ）年、キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

鮎川蓮のコメント

『無神論者にとってはとてつもなくどうでもいい』

教師のコメント

君の思想はともかく、テストですので真面目にお願いします。

第十五話　フィクションの中の出来事で、リアルでも起こってほしいことは起こらないくせに現実では起こってほしくないようなことは起こる不思議。

蓮Side

週末。僕は秀吉と買い物に出ていた。

「どうして僕が演劇部の買い物に付き合わされるのさ？」

「部長殿から頼まれたからかのう」

「どうして？」

「ワシも詳しくは知らんのじゃが“転入してきた男の娘をゲットしないわけには行かない”とか言っておったのを聞いたぞ」

「秀吉。その部長さんの言うことを聞きちゃだめだ。なんか取り返しの付かないことになりそうな気がする」

というか、そこまで露骨に言われているのにどうして秀吉は気づかないんだ？

「で？ 買い物は終わったの？」

「いや、最後に駅前で小道具と衣装の下見を……」

「衣装ならさつき買ったし、小道具だって部室にたくさんあるじゃないか」

一応説明しよう。

僕は今週秀吉に連れられて演劇部の部活見学に行っていたりしたのである。

「甘い。甘いぞ蓮！」

「何故に怒られる？」

「演劇の小道具や衣装というものは、それこそ演目の数だけあるものなのじゃ！」

決して似たようなものがあるから、とか、これで代用できるから、などという理由で

妥協しては人々を感動させる演劇などできぬ！」

なんとという情熱……

その情熱を一割でもいいから勉強のほうに生かせばFクラスにはいることもなかったのに。

「そういえばお主、この前姉上とデートしたそうじゃな」

「デート？ そんなのしてないよ」

「そうなのかの？ 姉上がおぬしと一緒に映画を見たといっておったからってつきりデートをしたものじゃと……」

「確かに映画は見たけど……」

「なんじゃ。やっぱりデートしておるではないか！」

「あれをデートと呼ぶ人がいたらその人には今すぐ精神科へ行くことをお勧めするよ」

「いや、一緒に映画を見るのは十分にデートじゃと思うんじゃが……」



「れ、蓮？　なんか笑顔が恐いんだけど……」

「大丈夫。納得できるように説明してくればへし折ったりしないから」

「それってムグウ」

「アキ、静かにしなさい！」

島田さんに取り押さえられて、明久には事情を聞けないし、しょうがない。

逃げる準備だけしておこうか。

「尾根い様に家畜のにおいを付けでもしたら火あぶりにしてやります」

……どうしよう。今すぐ逃げ出したい。逃げないと拙い気がする。

「なにやらよう分からんが、明久たちは追っ手に追われているということかの？」

「そうなんだよ秀吉」

「なら、変装するというのはどうじゃろう？」

「変装？」

「ここに丁度演劇部の衣装があるのじゃが、これを着て変装すれば」

「ナイスだよ秀吉！」

着替え中……

「秀吉……これ女物だよ？」

「おかしいのう……部員がワシ用にと渡したんじゃが」

「秀吉用のが男物のはずないじゃないか！」

「明久、その突っ込みはおかしい！　そして何で秀吉まで着替えるのー！」

「……それはそれでいい（パシャパシャ）」

ムツッリーニ？　何故ここに。

「……自主トレ」

「心を読まれた」

「あ、明久君……」

「えっと……」

だめだ！ 姫路さんと島田さんは使えない！

「とっても似合ってます……」

「困っちゃうんだけど」

「あ、明久そんな大きな声出したら！」

「見つけました！」

ほら見つかった！

「美春とお姉さまの愛を冒流する豚……め？」

よし、敵は戸惑っている。今のうちに脱出を！

「ふ、不潔です！ 女の格好をすればお姉さまが好きになってくれると思つたら大間違いです！」

「いや、君が大間違い」

しまったあ！ つい突っ込んでしまった！

「神聖な美春とお姉さまの愛を冒流する豚共め、許しません！」

豚……共？

「いつの間にか僕までターゲットに入ってる！」

僕と明久の逃走劇が始まった。

「どうしよう？」

「こうなったら4方に分かれて逃げましょう」

「それって、僕か明久に生贄になれってこと？」

「私にいい考えがあります！ 文月学園に逃げましょう」

「そうか！ 学園なら！」

「試験召喚獣が使える！」

一路学園へ

「いた、竹内先生だ！」

「竹内先生は現国よ！ ウチぜんぜん戦力にならないんだけど」

「今はそんな警告言っつられる状況じゃない！」

「竹内先生！ 模擬試召戦争をしたいんですけど」

「はい。承認します」

「……試験召喚獣、試験召喚！」<sup>サモン</sup>「……」

召喚フィールドが展開され、僕たちはいつせいに召喚獣を呼び出す。

『現代国語 Fクラス 姫路瑞希&島田美波&吉井明久&鮎川蓮

345点&16点&68点&334点

』

「ひどい！ 美春たちの愛を邪魔する気ですか！」

いや、ひどいのは一緒にいただけで僕まで追い掛け回す君だと思う。

「試験召喚！」<sup>サモン</sup>

『現代国語 Dクラス 清水美春

132点』

Dクラスにしては点数が高い。文系、てことか。

「姫路さんと蓮の召喚獣がいれば恐くない！ この勝負もらった！」

僕と姫路さんの召喚獣が先頭に立って突撃する。

「ごめんなさい！」

姫路さんの召喚獣が大剣を振りかぶる。

「そうは行きません！」

清水さんの召喚獣がジャンプした。

僕と姫路さんの召喚獣を飛び越える。しまった！ 狙いは……

「ウチ？」

島田さんの召喚獣が清水さんの召喚獣に倒される。

けれど、僕の召喚獣が空きの背中に剣を振り下ろし清水さんの召喚獣を消滅させた。

「0点になった戦死者は補習うー」

何処からともなく現れた西村先生に、清水さんと島田さんが担がれていった。

「補習は嫌」

「美春はお姉さまと一緒になら鬼の補習も天国です」

最初からこれが目的で召喚してきたのか……

二人を担いでいた西村先生がふと立ち止まる。

「吉井、目覚めたのか？」

「誤解です！」

「大変だったね……」

「蓮は途中参加だからいいじゃないか。僕は駅前から追いかけてきたんだよ？」

「まず、僕が追いかける理由がなかった気がするんだけど……」

「まあ、終わったことだし気にしない」

「はあ……まあ、無事に終わったことだし『無事？』」

「木下さん？」

「吉井君と姫路さんは外してくれる？ 今から鮎川君に大事な話があるの」

「う、うん。わかったよ」

吉井君と姫路さんが階段を上がっていく。

「さて、それじゃあ、大事な話をしましょうか」

「大事な話って？」

「さっきね、秀吉と会ったんだけど……」

ヤバイ……木下さんの背後に鬼が見える。

「鮎川君には話したわよね？ 秀吉に女装させないようにつて」

「いや、今日のは秀吉が演劇の衣装を着ただけというか、不可抗力というか」

「なんでメイド服だったのよ……！」

無事に終わることは出来なかった。

第十六問 学園祭って一番テンションが上がるのは準備の時だったりするよね。

今日、PV5000突破を確認しました。

こんな駄文に付き合ってくださいる方がいることに感謝の念を禁じえませぬ。

今後も一層精進していく所存ですので  
どうか、よろしく願います!!

第十六問 学園祭って一番テンションが上がるのは準備の時だったりするよね。

学園祭の出し物を決めるアンケートにご協力ください。

『あなたが今一番ほしいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になるような、そういった出し物もいいかもしれないですね。

写真館なども候補になると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか？

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

鮎川蓮の答え

『平穏な日常』

教師のコメント

もうFクラスには慣れましたか？

第十六問 学園祭って一番テンションが上がるのは準備の時だったりするよね。

僕が文月学園に転入してから早一ヶ月が経った。  
今、文月学園の中は近日に迫った学園祭、「清涼祭」に向けて準備を行っている。

そして、文月学園一の問題児、我らがFクラスはというと……

「来い、明久！」

「勝負だ吉井！ お前の球なんて場外まで飛ばしてやる！」

「言つたな！ 勝負だ、須川君！」

野球をしてるんだよね……。

今、Fクラスの教室にいるのは、僕と秀吉、姫路さんに島田さんの四人だけだ。

当然、清涼祭に向けての話し合いをするつもりだったんだけど、この四人だけで何かが決まるわけもなく、僕は窓からグラウンドで命知らずな行いをしているクラスメイトを眺めている。

「さあ、ホームルームを始めろぞ」

教室の扉が開き、西村先生が入ってきた、が、がら空きの教室を見て固まっている。

「他のバカどもは何処だ？」

「グラウンドで野球してます」

「何故止めなかった？」

「止めましたよ。止めて聞くようならFクラスじゃないでしょ」

「それもそうだ。俺はあのバカどもを引っ張ってくるからお前たちは少し待っておくように」

そういつて西村先生は教室から出て行ったけど……怒りで声が震えてた。

「なぐにをやつとるかバカ共！！」

グラウンドから怒鳴り声が聞こえる。明久、ご愁傷様。

「さて、それでは清涼祭での出し物について意見を求めたい。実行委員の島田、任せた」

帰って来たはいいけど雄二が完全にやる気なしモードなんだよね。

「ちよつと、ウチだけじゃ無理よ」

「じゃあ、副委員を選出するからそいつと二人でやってくれ。皆、副委員にふさわしいと思う奴を推薦してくれ」

『やっぱり坂本がやるべきじゃないか？』

『いや、吉井だろ』

『我が蓮ちゃんでも……ぎゃあああああ！！』

皆口々に意見を述べ始める。最後の人は何度言っても聞かないから強硬手段に出たけど。

「それなら姫路さんが適任じゃないの？」

「いや、姫路は全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムオーバーだ」

「どういうこと？」

「要するに、姫路さんは誰かの意見を切り捨てられる人じゃないから、丁寧に話し合いをしているうちに何も決まらないまま清涼祭が来ちゃうってこと」

ここまで噛み砕いて説明すれば明久でも分かるだろう。

「ここまで噛み砕かれないと理解できない明久は本当のバカだな」

「なんだとバカ雄二！！」

「落ち着け」

雄二もいちいち火に油を注がないでほしい。

「と、言うわけだ。島田、さっき上がったやつの中から二人選んで

決選投票をしる。

それで選ばれた奴が副委員だ」

島田さんが黒板に書きは始める。

島田さん個人の気持ちとして、明久は候補に上がるだろうからあと  
は須川君あたりを対抗馬にすれば明久が副委員に……

「候補？……吉井

候補？……明久」

凄い。まさかそう来るとは思ってたよ。

「じゃあこの二人から選んで」

「待って、美波、その候補の上げ方はおかしい気がする」  
明久、気がする、じゃなくて本当におかしい。

「うーん、迷うな」

「ここは吉井じゃないか？」

「どっちもクズだからな」

クラスメイトは真剣に悩んでいる。演技だよな？

「こら、君たちも真剣に考えるフリをするな！ それと最後の人！

クラスメイトをクズ呼ばわりする君は人間のクズだ！」

明久、それだと君はクラスメイトと自分の両方からクズのレッテルを  
貼られることになるぞ。

「じゃあ、アキに決定ね」

貴女の目論見でしょうが！ まあ、島田さんの機嫌がいいと明久の  
命の危険が少なくなるからいいか……。

「じゃあ、文化祭の出し物で意見がある人は手を挙げて発表して」

「……（ピッ）」

「じゃあ、土屋」

「……写真館」

ムツツリーニ、君の言う写真館とは学校の、それも一般人も来る様なところで

展示してもいいようなものなのだろうか……

と、言うか危険な香りがぶんぶんする。

ふと黒板のほうを見ると、書記の明久がムツツリーニの意見を板書していた。

『候補？ 写真館「秘密の覗き部屋」』

明久。僕は今君のネーミングセンスに感動している。

ムツツリーニ主催の写真館がどういったものになってしまっただけで目に分かるネーミングだ。文化祭には適さないが。文化祭には適さないけど。

大事なことなので二度言わせてもらった。

「じゃあ、他」

「メイド喫茶……は使い古されていると思うので、ここは斬新にウエディング喫茶を提案する」

クラスメイトの一人が提案する。なんか下心があるような気がするけれど、斬新さ

という面では悪くない意見だと思う。

「ウエディング喫茶ってどうなの？」

「別にやることは普通の喫茶店と変わらないんだが、ウエディングドレスを着て接客するんだ」

「明久が？」

「蓮！ どうしてそこで僕の名前が出てくるの！ 着るのはもちろんかわいい姫路さんと秀吉に決まってるじゃないか！」

「アキ？ どうしてうちが入ってないのよっ！」

また明久が自爆した。明久だってそれなりにかわいい顔してるんだから似合うと思うけど、  
だめだ。明久に着せると僕まで着せられてしまいそうな気がする。  
ウエディング喫茶は回避せねば。

『斬新でよさそうだな』

『女子も喜びそうだな』

『でもウエディングドレスって動きづらくないか？』

『それに男は嫌がらないか？ 人生の墓場って言うくらいだしな』

また皆が好き勝手言ってる。真面目に議論してくれるだけよしとしよう。

『候補？……ウエディング喫茶「人生の墓場」』

明久は真面目に書いてるよね？ ウエディングと結びつかないような単語が入ってるけど。

「じゃあ、須川」

「中華喫茶を提案する」

今度は須川君だ。

「中華喫茶って、チャイナドレスでも着るの？」

「いや、俺の言っている中華喫茶はそんなイロモノ的なものじゃない。

本格的なウーロン茶と軽い飲茶を出す店だ。

そもそも食の起源は中国にあるという言葉があることから分かるように、こと『食べる』

という文化に対しては中華ほど奥が深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による

中華料理の淘汰が世間では見られるが本来食というものは

「

どうしたんだ？ あの須川君が熱く語りだした！  
言ってることは半分くらいしか分からないけどとにかく何かしらの  
信念があることは良く伝わったよ。

『候補？……中華喫茶「ヨーロッパ」』

明久は本当は天才なんじゃないだろうか……

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

ドアから西村先生が入ってきた。西村先生は僕たちを顔を一度見た  
あと、

島田さんに声を掛けた。

「今のところ黒板に書いてある3つの案が出ています」

西村先生は黒板に目線に移す。当然ながらその黒板には明久の天才  
的ネーミングセンスの  
結晶が書かれているわけで

『写真館「秘密の覗き部屋」

ウエディング喫茶「人生の墓場」

中華喫茶「ヨーロッパ」

』

「補習の時間を倍にしたほうがいいかも知れんな……」

補習が倍？ 今が毎日2時間だから4時間？ 帰るのが8時近くに  
なるじゃないか。

別に僕が遅くて困るような家族はいないからいいけど、Fクラスの  
面々は

補習が増えることを必死で回避しようとする。

「違います、これは吉井が書いたんです」

「バカなのは吉井であって決して僕たちがバカなわけではありません

ん！」

皆が明久を売る。

どうしてこのクラスはこういう時だけ変な団結力を発揮するんだらう……

「見苦しい言い訳をするな！」

おお！ 西村先生が明久をかばったよ。やっぱりこの人も教師なんだな。

「先生はバカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行為だといってるんだ」

こんな人が教師でいいのか！

「まったくお前たちは……少しは真面目にやったらどうだ？」

稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか思わないのか？」

Fクラスが色めき立つ。その発想はなかったけど、この学校でそれは認められるのだろうか？

「西村先生、そんなことしていいんですか？」

「ああ。本来は認められないことだが、今のFクラスの設備はあまりにもひどい。

学力によって差をつけるのがこの学校の教育方針だからといってその所為で体を壊しては

本末転倒！ 今回は俺が特別に学園長に掛け合ってやる」

うーん……あのばあさんが一教師の言うことを聞くとは思えないんだけど……

『出し物どうする？ 利潤の多い喫茶店がいいんじゃないか？』

『けど初期投資の多い写真館のほうが』

「いや、写真館は文化祭に出せないようなものになるに決まってる

でしょ」

『中華喫茶なら外れはないだろ』

『それだと目新しさに欠けるな。ただでさえ旧校舎は汚いせいで人が来ないんだ。』

特徴のなさは致命的じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった二日間の清涼祭じゃ儲けは出ないだろ』

『リスクが大きいかからこそリターンも大きいはずだ』

「いや、そもそもうちのクラスは女子が少ない。ウエディング喫茶だと

ドレスの着て接客する人数が少なくて人手不足は避けられない」

西村先生の言葉で一気に活気付いたFクラス。

さまざまな意見が飛び交っている。それに何よりちゃんと議論になっていることが意外だ。

「はいはい。ちょっと皆静かにして」

島田さんが皆を制止するがお構いなしに議論は続く。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きトウモロコシを売ろう』

島田さんが呆れ顔になっている。やっぱり雄二がいないとこのクラスはまとまりに欠けるよ。

「もうっ！とにかく静かにして。決まりそうにないから店はさっき上がった候補の中から選ぶからね！」

島田さんの一喝でようやくクラスが静かになった。

が、島田さんの発言を聞いて今度はブーイングが飛び交っている。

「ほら！ ブーブー言わないの。この三つの中から一つだけ選んで手を上げること。」

「いいわね」

有無を言わさない島田さん。彼女は意外と人をまとめる才能があるのかもしれない。

「じゃあ、写真館」

手は余りあがらない。ムツツリー二の写真館が文化祭では危険なものになると皆良く理解しているようだ。

「次はウエディング喫茶」

これは阻止しなければ。僕や明久、秀吉は確実に着せられてしまう！

「最後に中華喫茶」

僕はここに手を上げる。

というかここしかまとまな利益を上げらえらそんな案がない。

島田さんが上がった手の数を数えている。結果、

「Fクラスの出し物は中華喫茶に決定します！ 全員、協力するよっに！」

良かった。ウエディング喫茶は回避できたようだ。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

そういつて須川君が立ち上がる。さつきも熱く語っていたし、中華にはこのクラス一精通しているだろう。

「……（スクツ）」

それと、ムツツリーニも立ち上がった。きつと自分も厨房を引き受ける、という意味表示だろうけど、

「ムツツリーニ、料理なんて出来るの？」

僕と明久の声が重なる。

「……紳士の嗜み」

意外と立派な理由だ。てつきりチャイナ服目当てで中華料理屋に通っているうちに

見よう見まねで覚えた、とかそんな理由だと思っていた。

「まずは厨房班とホール半に分かれてもらうわね。厨房班は須川と土屋のところに。」

ホール班はアキのところに行って頂戴」

いつの間にか明久がホール班筆頭に立たされているけどいいのかな。そして、僕は厨房班に並んだけど、同じ列に姫路さんがいる！

「それじゃあ私は厨房班に」

「だめだよ姫路さん。君はホール班じゃないと！」

姫路さんを厨房に入れると、学園祭で使者が出かねない。

「明久よくやった」

「明久グツジョブじゃ」

「……（コクコク）」

僕、秀吉、ムツツリーニは冷や汗をかきながら明久のファインプレーにアイコンタクトをする。

「どうして私はホール班じゃないといけないんですか？」

「それは姫路さんが厨房に立つと死nmグウ！」

「ほら！ 姫路さんはかわいいからホールでお客様と接したほうが店として利益が痛ぁ！」

いや、危なかった。危つく姫路さんに本当のことを伝えてしまうところだった。

「か、かわいいなんて……吉井君がそういうならホールでも（・・）」

頑張りますね」

「いや、ただでさえ女子が少ないんだからホールは専任のほう効率がいい。」

姫路さんはホール専門で動いてくれないかな？」

「は、はい。そういうことなら」

これで危機は去った！

「「じゃあ、僕は厨房クシにしようかな（かの）」

「だめだよ！ 蓮も秀吉もそんなにかわいいんだからもちろんホールに決まってみぎゃ！」

み、美波様、折れます！ 腰の骨が！ 命に係わる大事な骨があ！」

「……うちもホールにするわ」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

明久が死に掛けている中。僕たちFクラスの人並みの学校生活をかけた

学園祭の出し物は中華喫茶に決まった。

第十七問 人間は些細なことで勘違いするって言うけど、その勘違いが命の危機

バカテスト 世界史

問 エジプト第18王朝のファラオで、多神教を廃し、世界初の一神教を始めるなどの

『アマルナ改革』で有名な人物を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『アメンホテプ4世』

教師のコメント

正解です。彼が崇拝した唯一神のアトンから、『イクナートン』とも呼ばれます。

吉井明久の答え

『イエス・キリスト』

教師のコメント

違います。キリスト教も一神教ですが、エジプト宗教よりもかなり後のものです。

鮎川蓮の答え

『ルイ18世』

教師のコメント

そんな人物はいませんし、そもそもエジプトの人物ではありません。

島田美波の答え

『ハイデルベルク』

教師のコメント

古い人物を答えればいいというものではありませんし、  
『ハイデルベルク人』は原人です。

第十七問 人間は些細なことで勘違いするって言うけど、その勘違いが命の危機をもたらすこともあると覚えておいてほしい……

「アキ、ちょっといい？」

帰りのHRも終わって、明久と帰ろうとしていたら島田さんに呼び止められた。

「ん、何か用？」

「用って言うか、相談なんだけど」

島田さんのことだから学園祭に関することだろう。

「相談？ 僕でよければ聞かせてもらおうけど」

「うん。ありがと。アキが言うのが一番だと思うんだけど」

その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

確か雄二がいればFクラスもまとまるし、中華喫茶もいい方向に持って行ってくれるだろう。

島田さん本人が無理に言うより、仲が良い明久が行ったほうがいいと考えるあたり、

島田さんも賢明な人だと思う。

「うん。それは難しいかな。雄二は興味のないことには徹底的に無関心だし」

「それは僕も思う。前の試召戦争は雄二自身がやりたいと思ってたからあそこまで

皆を先導して突っ走ったけど、興味のないこととか普段の生活ではろくな事してないからね」

この一月、明久たちと関わって分かったことだ。ちなみに、僕は試召戦争でのことも

関係あるのか、明久たちと仲が良い。明久の家には良く遊びに行ってる。

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

何故島田さんはそんなに確信を持っているんだろう。

明久を期待をこめたまなざしで見ているし。

「え？別に僕が頼んだからといってアイツの返事は変わらないと思うけど」

「ううん。そんなことない。きつとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって」

「確かに良くつるんではいるけど、だからといって別に」

「だってあんたたち愛し合っているんでしょ？」

「どうしてそうなった！島田さんに何があつたんだ！」

僕が見る限り明久にも雄二にもBでしな趣味はないはずだ。

「というか、雄二は霧島さんって言う彼女がいるんだから明久と、何てことある訳ない。」

「もう僕お婿にいけない！」

明久はなんか想像してしまつたのか絶望しているし。

「何で雄二なんかと！ だったら僕は断然秀吉や蓮のほうがいいよ！」

「……あ、明久？」

偶然近くにいた秀吉が立ち止まる。さっきの明久の発言を聞いていたんだらう。

何処から聞いていたかは分からないけど、もし明久のさっきの台詞しか聞いていなかったら、絶対勘違いする。

「そ、その、おぬしの気持ちは嬉しいのじゃが、お主とワシの間には色々と」

障害があると思うのじゃ……その、年の差とか」

だめだ！ 秀吉が壊れている！ 早く何とかしないと……

「ひ、秀吉！ 違うんだ！ さっきのはただの言葉のアヤで！」

それと、僕たちの間にある障害は決して年の差じゃないと思う！」

「強いて言うなら性別の差だね……あれ？ それじゃあ僕が上がつたのは何故？」

明久まで僕のこと女の子としてみてるわけじゃないよね。

もしそうならちょっと、お、は、な、し、しないと。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「う、うん。そういうことになるかな」

明久だけじゃなく、秀吉まで頭を振っている。

「何とかできないの？ このままだと、喫茶店が失敗に終わるよう  
な……」

今回の清涼祭はFクラスにとってチャンスでもある。

利益を上げて設備を買うことが出来れば体の弱い人、主に姫路さん  
の負担も軽くなる。

出来れば成功させたい。

「ところで、おぬしらは何の話をしておるのじゃ？ そこまで思い  
つめた顔をするところを見ると、深刻な話のようじゃが」

まだちよつと顔が赤い秀吉。

「深刻って程の話じゃないよ」

「うん。ちよつと清涼祭の喫茶店の経営やクラスの設備の話で

」

「ちがうわ。アキ、鮎川。本当に深刻な話なのよ……」

「え？ どういうこと？」

島田さんの台詞はなんか妙に現実味を帯びている。

何か、僕たちにとって良くない問題が起こっているのか……

「本人には誰にもいわないでほしいって言われてたんだけど……事  
情が事情だし……」

いい？ これから話すことは絶対誰にも言っちゃだめだからね？」

「う、うん。わかった」

「真剣な話みたいだしね。他言はしないよ」

「実は、瑞希なんだけどね」

なるほど。大体分かった。

「姫路さんがどうかしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

明久が首をかしげる。なんか頭から湯気が出てるし、目が虚ろだ。

「いかん！ 明久が処理落ちしておるぞ！」

「もうっ！ 本当に不測の事態に弱いんだから！」

「落ち着くんだ。まずは頭をはずして熱を逃がさないと！」

「「アンタ（お主）が一番落ち着きなさいよ（落ち着くのじゃ）」  
僕、なんかおかしいこと言っただけ？ 機械が熱を持ったらず熱を逃がさないと……」

「明久、目を覚ますのじゃ」

明久の肩を持つて揺らす秀吉。そうか！ 明久は人間だから頭が外れる訳ないよね。

「秀吉……モヒカンになった僕でも好きでいてくれるかい？」

明久から異次元の反応が返ってきた。

「……どういう処理をしたら瑞希の転校からこんな反応が返ってくるのかしら」

「ある意味稀有な才能かも知れんのう……」

「確かにこのレベルのバカは世界中探してもなかなかいないよね……」

「美波！ 姫路さんが転校って、どういことさー！」

明久が復活した。急に島田さんを問い詰めるから、島田さん顔が赤いよ。

「ど、どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと……？」

多分姫路さんはまだ、転校を勧められている段階だと思っ。

原因は多分Fクラス的环境、といったところか。

「島田よ、姫路の転校とさっきの話がぜんぜん繋がらんのじゃが」「そうでもないでしょ。姫路さんが転校する、多分まだ転校を勧められている段階だと思うけどその理由は『Fクラス的环境』なんだから」

「鮎川のいうとおりよ」

「ってことは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて……」

「純粹に設備の問題になるわ」

「いや、それだけじゃない」

島田さんだけじゃなく、明久と秀吉まで首をかしげている。

「それだけじゃないってどういうこと？」

「姫路さんの両親が転校を勧めている理由は一つじゃない」

「だから、それはなんなのよ」

「一つはさっきまで島田さんが言った『Fクラス的环境』」。

振り分け試験で体調を崩す娘が最悪の設備で暮らしている。普通の親なら心配する」

「じゃあ、他には？」

「二つ目は『教室自体』」

「教室そのものが問題、ということかおう？」

「そう。老朽化して汚れている教室。隙間風も入るし、衛生的とはいえない」

「なるほど」

「最後に『競争相手の不在』」

「競争相手？」

「そう。Fクラスは最低クラスだから、当然姫路さんのクラスメイトはレベルが低い。」

勉強だけじゃなく、何事においても人は競争相手がいてこそ自分を高めることが出来る生き物なんだ。競争相手不在のこの状況は姫路

さんの成績に悪影響を及ぼしかねない」

「え？ でも、姫路さんの成績は……」

「実際にはFクラスに来てから姫路さんの成績は上がってるけど、それはFクラスの

影響だと姫路さんの両親は認めてない可能性がある」

「蓮。解決方法はないの？」

「一つ目はともかく、二つ目と三つ目は難しいのう……」

「いや、そうでもない」

「そうなの？」

「うん。三つ目の『レベルの低いクラスメイト』は島田さんがもう手を打っているでしょ」

「あ、召喚大会……」

「そう。そこで優勝できれば、Fクラスでも上位クラスと渡り合えるクラスメイトがいる、

という証明になる。それと、二つ目の『老朽化した教室』だけど、

これは学園長に頼むしかない」

「それって難しくない？」

「いや、ここは教育機関だ。いくら教育方針で設備に差をつけるといっても、

勉強に支障をきたすならば改善する義務があるはず。ていうのが僕の考えなんだけど、

やっぱり僕だけじゃ一つ目のクリアは難しい」

「結局は雄二を連れてこないといけないってことだね」

「そういうこと」

「アキ……瑞希が転校とか、嫌だよな？」

島田さんが聞くけど、なんか他意があるような聞き方だ。

「もちろん嫌に決まってる！ それが美波や秀吉であってても！」

「アキ……」

「明久？ それって僕は転校してもいいってことかな？」

「そ、そういう意味じゃないよ！ 蓮だつてせつかく友達になれたんだから転校なんていやだ！」  
「やっぱり明久らしい。こういうところがもてる理由なんだろうね。」

「そういうことならなんとんでも雄二を焚きつけてやるさ！」

「ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん！」

「なら、まずは雄二に連絡を取らないとね」

明久が携帯電話を取り出して電話をかける。

「あ、雄二？ え、ちよつと雄二？」

「どうしたんじや明久？」

「なんか『見つかつちまった』とか、『かばんを頼む』とか言ってた」

霧島さんだね……

「ちよつと美波！ そんな使えないな、見たいな目で見ないで！」

「でもこれじゃ、坂本と連絡を取るの難しいわね」

「いや、これはチャンスだ」

「明久、どう見てもチャンスには見えないんだけど」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すにはちよつどいい状況なんだよ。三人とも、協力してくれる？」

「それは別にいいけど、どうするの？」

「人の考えを読めるのは雄二だけじゃないってこと」

「何か考えがあるようじやの」

「まあね」

「それなら僕も協力するけど、どうしたらいい？」

僕らに作戦を伝えた後、明久はどこかへと去って行った。

「さてと、この後は明久から電話があるまで待機、でよかったよね」

「？」

「うむ」

「といっても、何かするのは木下だけだね」

今回の作戦は、簡単に言えば雄二を脅すものだ。その為に電話口で秀吉が霧島さんの声真似をすることになっている。

待機すること十数分。秀吉が持っている携帯電話に着信が入った。

「……雄二、今何処？」

やっぱり秀吉の声帯模写は完璧だ。面と向かって言われても気づかないくらいだし。

「人違いです」

すごい勢いで電話が切られた。

雄二に殺されかけてる明久が目には浮かぶ。

「秀吉、島田さん、ちょっと明久が危なそうだから迎えに行ってくるよ」

明久は確か体育館に向かったはずだ。

体育館に向かっていると、二階の空き教室から明久と雄二の気配がした。

「明久、生きてる？」

「ああ、今から明久を殺そうとしていたところだが……」

お前も一枚噛んでたのか？」

雄二が鋭い目つきで僕に問いかけてくる。一目で怒っていると分かる。

「雄二、僕がそんなことに……協力しないわけじゃないか！」

僕個人的には雄二は早く観念して霧島さんと結ばれるべきだと思っ

「そうか、なら……お前からだあ！」

雄二が殴りかかってくる。

「甘いよ、雄二！」

雄二の右手を取り、そのまま腰をひねって投げ飛ばす。

雄二が窓際まで吹っ飛び、窓ガラスが大きな音を立ててゆれた。

「ここに誰がいるの？」

空き教室のドアを開けて入ってきたのは我が天敵、木下さんだ。

僕は最近何故か良く木下さんに会うし、絡まれるし心臓に悪い。

「吉井君に坂本君……鮎川君までどうしてここにしているのかな？」

ものすごい笑顔で木下さんが聞いてきた。

何故彼女はこんなに怒っているんだろう。

「れ、蓮！ 頼まれた物は渡したから僕は行くね！」

「ああ。蓮また後でな！」

そついい残してすごい勢いで去っていった明久&雄二。

ものすごく嫌な予感を感じるのは気のせいじゃない。

「『頼まれたもの』？ 鮎川君は何を頼んだのかしら？」

「まず、なぜ木下さんが明久と雄二を追いかけたのか聞かせて

もらえませんか？」

「あの二人が女子更衣室に忍び込んでいたんだけど、まさか鮎川君

も一枚噛んでたなんてね……」

「き、木下さん！ 僕はあの二人から何も貰ってないし、そもそも

あの二人が

女子更衣室にいたことすら知らなかったんですけど？」

「こんな状況でそんな言い訳が通じると思うの？」

ハハッ……今日が僕の命日のようだ。

第十八問 人は想像以上に打算で動いている。

清涼祭アンケート

『喫茶店を経営する場合、どのような服装をするのが良いでしょうか』

姫路瑞希の答え

『可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかかりませんし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。

色は白を基調をした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返し  
が得られるくらいの物を用意し、

裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書かなくても。

鮎川蓮の答え

『迷彩服』

教師のコメント

君は喫茶店で何をするつもりなんですか？

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

第十八問 人は想像以上に打算で動いている。



木下さんが赤面しながら僕の腕を極めている！  
「わ、分かった！ 分かったからもう放して！」  
ようやく僕の腕が苦痛から開放される。

僕が腕の痛みから立ち直ると、空き教室に僕と木下さんの二人が向かい合って座っているという、少々奇妙というか、気恥ずかしい空気がする空間が出来上がっていた。

「じゃ、じゃあ、アタシのこと、これから名前で呼ぶことでいいわね。れ、蓮？」

「分かったよ……ゆ、優子」

言っただけいいけど絶対顔赤いよ僕！

木下さんも顔赤くて変な雰囲気になってるし。

「じゃ、じゃあ僕はクラスの展示物の打ち合わせがあるから。

じゃあね木……優子」

「うん。じゃあね蓮」

木下さんもと優子と別れ僕はFクラスに向かった。

もちろん明久と雄二にはO H A N A S H Iしないと。

Fクラス

僕がFクラスに着くと、雄二&明久は島田さん、秀吉と一緒に話し込んでいた。

「……雄二、見つけた」

雄二の死角から気配を消して霧島さんの声で話しかける。

雄二は話しかけられた瞬間にビクウツ！ と大きく反応して、ギギギッと、



る。

「で？ 雄二は協力してくれるの？」

「ああ。さっきまで島田から状況の説明を受けていた。

明久が大好き（・・・）な（・・・）姫路の（・・・）ため（・・・）、でもあるしな。協力してやろう」

明久は雄二の協力を取り付けられたらしい。これで中華喫茶はなんとか成功するだろう。

「で、坂本？ どうするの？」

「姫路の転校か……それだと設備だけでは不十分だな」

「そ、それ蓮も言ってたよ……」

明久が口を挟んでくるけど、まだ島田さんから受けたダメージが回復してないみたいだ。

さすがに可哀想だからこれでさっきのことは水に流してあげよう。

「さて、本題に戻るが、俺が言ったことを蓮も言ってたってことは、お前らは今の状況を理解していると思っただ話を進めるぞ」

「うん。それで、教室の設備のために中華喫茶を成功させたいんだ」

「ああ。だが、それだけでは不十分だ。レベルの低いクラスメイト、については

姫路と島田が召喚大会でいい結果を残せば何とかなる」

「問題は教室の修繕、だよな？」

「そうだ。こればかりは学園長に直接掛け合ってみるしかない」

「じゃあ、ウチも行くわ」

「いや、姫路の事情を知っている島田が学園長室へ行ったら俺たちに事情を話したと思われるからな。お前は残ってくれ」

僕たちは一路学園長室へ。

「ちょっと待って」

「蓮、どうしたの？」

学園長室から人の声が聞こえてきた。

『……賞品……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月グランドパークに……』

二人が言い争っているようだ。

「どうした？」

「いや、学園長室の中から言い争うような声が……」

「なら、学園長はいるんだね」

「ああ。目的が中にいるんだ。さっさと入るぞ」

明久と雄二がさっさと中に入っていつてしまった。

「失礼しまーす」

「ちょ、明久っ」

「お主ら……」

僕と秀吉の制止も何処吹く風と、明久と雄二はずかずかと入り込む。

「本当に失礼なガキだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

部屋においてある立派な机に座っていたのは長い白髪に皺の刻まれた顔を持つ

文月学園の学園長、藤堂カヲルだった。

試験召喚システムの開発者でもあり、システムの軍事転用に反対している人物でもある。

「やれやれ、取り込み中だというのにとんだ来客ですね。これでは話をするのもままならない……まさか貴女の差し金ですか？」

学園長と言いつ争っていたのは教頭の竹原先生のようだ。

鋭い目つきのクールな態度で一部の生徒からは人気らしいけど僕はあまり好きじゃない。

「やれやれ、取り込み中だというのにとんだ来客ですね。これでは

話をするのもままならない……まさか貴女の差し金ですか？」

「バカを言わないでおくれ。何でアタシがそんなせこい手を使わないといけないのさ。」

「負い目があるわけでもないのに」

「どうでしょうか。学園長は隠し事が得意のようですから」

「さつきから言っているように、隠し事なんてないね。あんたの見当違いだよ！」

「……そうですか。そこまで否定されるのならこの場はそういうことになっておきましょう」

明らかに教育現場に似つかわしくない会話を終えた教頭が学園長室を出て行く。

最後に教頭が一瞬目を向けた場所を見てなにか引つかかることを感じただけ。

「んで、ガキ共、用件はなんだい？」

「今日は学園長にお話しがあつて来ました」

「アタシは今、それどころじゃないんでね。学校の経営に関することなら教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会のルールってもんだよ。覚えておきな」

「失礼しました。俺は2年Fクラス代表の坂本雄二」

「僕は同じクラスの鮎川蓮です」

「同じくFクラスの木下秀吉じゃ」

「そしてこちらの二人が……2年を代表するバカと、学園を代表するムツツリです」

雄二が、明久とムツツリー二をちよつと失礼な方法で紹介する。

「そうかい。あんたらが吉井に土屋かい」

「ちよつと待つて学園長！ 僕らは一度も名乗ってませんよね」

「……心外」  
「気が変わったよ。話を聞いてやるうじゃないかい」  
「Fクラスの設備の改善を要求してきました」  
「そうかい。それは暇そうで羨ましいね」  
「今のFクラスの現状は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるようなひどい状況です」  
雄二のメッキがはがれはじめた。

「学園長のように戦国時代から生きているような老いばれならともかく、現代の学生には  
この状況は危険です。健康に害を及ぼす可能性が高いと思われます」  
雄二の言動がだんだん通常時に近づいてくる。

「要するに、隙間風が吹き込むような教室の所為で体調を崩す生徒が出てくるからさっさと直せ、クソババアということです」

「雄二が大変なしつムグウ!!」  
秀吉が謝ろうとしているのを僕が抑える。交渉の途中で相手に謝るのは愚の骨頂だ。

学園長のほうはなにやら考え込んでいるようだ。

「ふむ……丁度言いタイミングさね」

「あの、学園長？」  
なにやらつぶやいた学園長に、明久が声を掛ける。

「よしよし。あんたらの言いたいことは良くわかったさね」

「じゃあ、直してもらえますね!」

明久が自分たちの要求が通ったと思いい声を上げる。

「却下だね」

「雄二。このババアをコンクリに詰めて海に捨ててこよう」  
「ここは僕も参加しておこうか。」

「明久、それじゃあ証拠が残る。この学園には焼却炉があるんだからそこに突っ込んで燃やしたほうがいいよ」

「お前ら、失礼だぞ!!!」

「雄二が言えたことではないのじゃ」

「まったく、このバカ共が失礼しました。ともかく理由を聞かせてもらえますか？ババア」

「そうですね。教えてくださいババア」

「あんたらは本当に教えてほしいと思ってるのかね！」  
学園長の怒りも、それなりにもっともだと思つう。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針さね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、このなまっちろいガキ共」

「でも、それじゃ体の弱い生徒が……」

「と、いつもなら言っているんだけどね、かわいい生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやろうじゃないか」

学園長はク口確定だ。教頭がらみで何かしらの問題を抱えているのは確かだ。

となりで雄二も黙り込んでいる。

「その条件つてなんですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるね？」

「ええ。俺と明久で出ようと思つてました」

それは初耳だ。

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

確か、トロフィーと「白金の腕輪」。副賞に如月グランドパークのプレミアムペアチケット

だったと思つう。

「優勝賞品がどうかしたんですか？」

結局、学園長が僕らに出した条件は優勝賞品の如月グランドパークのプレミアムペアチケットの回収だった。

「間違っても優勝者から強奪、何てするんじゃないよ！ 譲ってもらうのもだめさね。」

あたしはアンタ等に召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

「分かりました。雄二、ペア分けはどうする？」

「俺と明久、蓮と秀吉でいいだろ」

雄二は前回の召喚大会で一回も召喚してないから当然と言えば当然だ。

「あ、言い忘れてたけど鮎川は出場するんじゃないよ！」

「「どうしてですか？」」

僕と明久の声が重なる。

「アンタの召喚獣は刺激が強すぎるからだよ。」

さきのAクラス戦でもアンタ、相手の召喚獣の頭を吹飛ばしたらしいじゃないかい。

スポンサーも見に来る召喚大会でそんな戦いは見せられないさね」

うーん……もつともだ。召喚獣はデフォルメされてはいるけど人間の形をしている。

その頭が消し飛ぶなんてあまり見せられる光景じゃない。

「なら、蓮が戦い方を自重すればいいんだなババア？」

「……ま、まあそれならいいさね」

さっきの呟きといい僕を出場させたがらないことといい怪しすぎる。

「よし、それならさっき言ったようなペアで出るぞ」

「宜しく頼むぞ、蓮」

「うん。こちらこそ」

「用は済んださね？」

「いや、一つ頼みたいことがある」

「……なんさね？」

「この召喚大会は一回戦数学、二回戦英語……といったように勝ち進むごとに教科を変えてやっていくと聞いている」

「それがどうかしたさね？」

「組み合わせが決まったらその教科の指定を俺たちにやらせてほしい」

「ふむ。点数の水増しとかだったら一蹴していたけどそれくらいならいいさね」

学園長の発言で雄二の目が細くなる。

多分僕と同じことを考えていると思う。

「ここまでしてやるんだ。当然優勝できるんだろうね？」

「当たり前だ。俺たちを誰だと思っている」

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ約束を忘れないように」

「明久たちには負けぬのじゃ」

「僕がいることを忘れないでよね？」

全員やる気はある。問題なく勝ち進めるだろう。

「それじゃ、坊主共任せたよ！」

こうして僕たちの召喚大会出場が決まった。

第十八問 人は想像以上に打算で動いている。(後書き)

そろそろ、ストックがなくなってきたので

毎日、もしくはそれに近い間隔の更新が出来ない可能性が出てきました。

もちろん出来るだけ毎日更新していきますが、

更新できない日が出てきたときは暖かい目で見守っていただけると幸いです。

第十九問 謀略洞巻く清涼祭！ ていうとカッコイイけど要するに内輪もめ。

更新が遅くなると宣言した途端に2日あいてしまいました。  
すみません。

第十九問 謀略渦巻く清涼祭！ ていうとカツコイイけど要するに内輪もめ。

バカテスト 現代社会

問『PKOとは何か説明しなさい』

姫路瑞希と鮎川蓮の答え

『Peace Keeping Operation（平和維持活動）の略。』

国連の勧告を元に、加盟各国で行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですがUnited Nations Peacekeeping Operationとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくといいでしょう。

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tuki Oppaiの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカーのこと』

教師のコメント

君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

鮎川蓮のコメント

どうして中途半端に古い人ばかりなんだ？

第十九問 謀略渦巻く清涼祭！ ていうとカッコイイけど要するに  
内輪もめ。

学園長との交渉を終え、雄二たちが帰った後僕は学園長と話をして  
いた。

「学園長は何を隠しているんですか？」

まず目下の問題はこれだ。この学園長がペアチケットに企業の陰謀  
が係わっている程度の問題で僕たちに協力を取り付けるはずがない。

「何の話さね？ あたしは何も隠していないさね」

「ならどうして僕の出場を嫌がったんですか？」

「別に、アンタの戦い方が外部の人間に見せるに多少適さないだけ  
さね」

やっぱり何か隠している。

僕は紙とペンを取り出し文字を書いてから学園長に見せる。

『この部屋は盗聴されているのでここからは筆談で用件を話します』  
『何時気づいたんだい？』

『教頭がこの部屋から出て行くときに植木鉢の付近を見ていました。  
雄二とあなたが話しているときにちょっと調べてみたら盗聴の気配  
がありました』

『まったく……あんたは本当に化け物さね』

『そんな化け物を入学させたのはあなたですよ……関係ない話はお  
いておきましょう。』

何故“低得点者”に優勝してほしいんですか？』

雄二、明久、秀吉の三人と僕の決定的な違いは点数。

雄二はちよつと予測できないけれど、明久と秀吉は総合1000点  
行くか行かないかだ。

それに対して僕は4000点を超えている。

「本当に頭が回るね」

「そりゃどうも。まあ、本当の目的は僕が事前に聞くと影響があるかもしれないから」

「良いとして……僕が決勝に進んだ場合は使う科目以外を0点にすれば問題ないですね？」

「……そこまで気づいているなら何故止めないんだい？」

「雄二はもう気づいていますよ。それに……あなたは一応恩人ですから」

「……それで良いさね。くれぐれも他言は無用だよ」

「了解……あと、盗聴器はそのままにしておきましょう」

「何故さね？」

「盗聴器が外されれば教頭は自らの企みがばれたと思い、何かしらの行動を起こすでしょう。その行動がFクラスのメンバーを危険に曝すことになるかもしれません」

「……分かった。盗聴器はそのままにしておくよ。用が済んだら怪しまれないうちに早く出て行くさね」

「分かりましたよ。じゃあ、召喚大会は期待してください」

僕はそう書き残して部屋を出て行く。

清涼祭初日。僕らの中華喫茶も雄二の指揮の下かなりまともなものになった。

店内の装飾もそれなりのものになり、あのFクラスの設備で作ったとは考えられない出来になっている。

「このテーブルなんて本物と見分けがつかないよ」

並べられたテーブルはFクラスのみかん箱を並べて、

何処からか持ってきたテーブルクロスをかけただけのもの。

「ま、見掛けはそれなりになったがの。その分クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がテーブルクロスを捲る。

当然その下にはFクラスならではのみかん箱が鎮座しているわけで

「これを見られたら、店の評判はがた落ちね」

「大丈夫でしょ。いちいち店のテーブルの下まで確認するお客さんはいないだろうし、

もし見られても心のうちに閉まっておいて貰えるって」

「そうですね。態々クロスの下をアピールする人はいませんよね」

「おいおい姫路、たかが文化祭で営業妨害する奴はいないって」

雄二の言うとおりだ。

そんなことしても何一つメリットはない。

思いのほかきれいにまとまった店内を、姫路さんは成功するかも、という希望で一杯の顔で見渡す。

「……飲茶も完璧」

いつの間にかムツツリーニが加わっていた。

「ムツツリーニ、厨房はどう？」

「……味見用」

そういつてムツツリーニが差し出したのは小皿に盛り付けられた胡麻団子。

「おいしそうね。土屋、これ、貰っていいの？」

「……（コク）」

「では、遠慮なくいただきます」

言うが早いか秀吉がその中の一つを口へ運ぶ。

それに続くように姫路さんと島田さんも胡麻団子を頬張った。

「お、おいしいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし」

「甘すぎないところも良いのう」  
よほどおいしいのか、三人とも目を細めて幸せそうな表情をしている。

「それじゃ、僕も貰おうかな」  
「僕も」

明久に続いて僕も皿に残った胡麻団子を口に入れる。

「ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバネバ。甘すぎず辛すぎる  
味わいがとつても……」

「ンゴパツ!!!」

胡麻団子にはありえないような味に、僕と明久は天に召されたのだ  
つた。

「……それは姫路が作ったもの」

「知ってたなら止めてよ!」

「そうだよ! 僕も明久も危うく天に召されるところだったんだけ  
ど!」

改めて姫路さんの料理の威力を思い知らされた。

「うーっす。帰ってきたぞ……明久と蓮はどうして震えてるんだ?  
そこへ何も知らない雄二が帰ってきた。」

「あ、雄二お帰り」

「えっと、これはね」

「ん? なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ……」

雄二は皿に残った“明久の食べかけ”を躊躇なく口に運んだ。

「……大した男じゃ」

「雄二、君は今最高に輝いているよ」

「人の話は最後まで聞こうね？」

「……合掌」

「？ お前らが何を言ってるのか分からんが……ふむふむ。表面はゴリゴリではネバネバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとつても……ンゴパツ！！」

あ、なんか既視感<sup>デジャブ</sup>。

「雄二、大丈夫？」

明久が雄二を突きながら聞く。

「ああ。何の問題もない」

良かった。雄二も大丈夫だったみたいだ。

「……あの川を渡ればいいんだろう？」

「「だめだ雄二！ その川を渡ったら戻れなくなっちゃう！！」」  
思わず声が重なる。

明久が雄二に必死に心臓マッサージ。

もちろんちよつと遠くで話している姫路さんたちに怪しまれないように

口では「雄二起きろ〜」なんて軽い言葉を吐いている。

「六万だと！ バカを言え！ 普通渡し賃は六文と相場が決まって

……ハッ！」

こうして尊い命がまた一つ救われたのです。

「ところで雄二は今まで何処へ行っておったのじゃ？」

「ああ。ちよつと話し合いにな」

ということは学園長に科目の指定をしてきたところだろう。

ちなみに作戦なども雄二任せなので科目も雄二に一任してある。

「ご苦労様。喫茶店はいつでもいけるよ」

「ばつちりじゃ」

「……お茶と飲茶も大丈夫」

唯一の心配事は姫路さんが本当に厨房に立たないかということである。

僕たちはともかく、お客さんの口に入ったら……考えたくない。

「よし、少しの間喫茶店は秀吉と蓮、ムツツリー二に任せる。明久、俺たちは先に

一回戦済ませるぞ」

「あれ？ 坂本君と吉井君も召喚大会に出るんですか？」

「うん。あと、蓮と秀吉も出るって」

「折角だしね。秀吉と雄二は召喚経験が少ないから僕と明久でそのサポートをするんだって」

僕も経験は少ないけれど、点数がある程度あるから何とかなる。

島田さんは姫路さんのために、ということを知っているので嬉しそうだ。

ちなみに、学園長からは“チケットの裏事情は誰にも話すな”という緘口令が敷かれている。

「もしかして、賞品が目的なんですか？」

姫路さんが聞く。賞品が賞品だから気になるよね。

「うん。そういうことになるかな」

チケットが目的といえば目的だけど、ちょっと意味は違う。

「……誰と行くつもりなの？」

「え？」

「私も知りたいです！ 吉井君、誰と行くのか教えてください！」

島田さんの目が一気に攻撃色を帯びる。

姫路さんまで明久に詰め寄った。

「え、ええつと……」

明久は答えにくそうだ。

もともと誰かと行くつもりはないんだから当然といえば当然だね。

「明久は俺と行くつもりなんだ」

「待て！ 雄二！」

突っ込みたい。突っ込みたいが、ここで出て行くと僕にまで雄二の間の手が及びそうだ。

すまない明久！ 君のことは忘れない……多分。

「ちよつとアキ！ どういうこと！」

「吉井君、男の子なんですから女の子に興味を持ったほうが……」  
明久がすごい勢いで誤解されていく。

「それが出来れば明久だつて苦労はしないさ」

「雄二、もつともらしくそんなこと言わないで！ ぜんぜんフォロ  
ーになってないから！」

それと蓮！ なんか言つてよ！」

「僕は男色家じゃないんだ」

「蓮のバカ野郎 ……！！」

もうここまできたら巻き込まれないようにするので精一杯だ。

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ、明久」

「つく、と、とにかく誤解だからね！」

もう既に色々手遅れになっている気がする。

明久と雄二が出て行った後。

「さて。僕たちも行くか」

「そうじゃの」

「あの、鮎川君、木下君」

僕たちも召喚大会に行こうと思つていたところで、姫路さんに声を掛けられた。

「どうしたの、姫路さん？」

「鮎川君と木下君はチケットはどうするつもりなんですか？」

「特に使い道もないから売るか、誰かに譲るつもりだけど、まずは召喚大会に勝たないとね。姫路さん達も」

「そ、そうですね。頑張りましょう！」  
危なかった。

「見事じゃったのう」

「秀吉も見てるだけじゃなくて何かフォローしてくれば良かったの」

「お主ほど上手くあしらえる自身はなかったのな。」

それにしても、姫路もだいぶFクラスに染まってきたのう」

僕らには召喚大会の勝敗よりも姫路さんたちの壊れ具合のほうが心配だったりする。

召喚大会一回戦。召喚大会はスポンサーへのアピールの目的もあるが、

それだけに良い試合を見せなくてはいけない。

そのため二回戦までは校内の人間だけの後悔に限られている。

僕と秀吉の一回戦の相手は、Eクラス代表の中林宏美さんと、同じく三上美子さんだ。

「あら。私達の相手はFクラスコンビみたいね」

中林さんが対戦表を見ながら言う。次になんていうかは予想できないけど……

「楽勝ね」

「秀吉、召喚獣の練習にはちょうどいい相手だから、頑張ってね」  
実際ちよつどいい。

「何よ！ Fクラスの分際で生意気だわ！」

「はいはい」

中林さんは独りでヒートアップしてるけど放っておこう。

「では、始めてください」

「……試験召喚」サモン「……」

先生の合図で一斉に召喚する。

僕の召喚獣はいつも通りの剣とよく分からない左手。

秀吉の召喚獣は着物に長刀を装備している。

僕達に相対する召喚獣は、

中林さんが野球のプロテクターにバットとグローブ。

三上さんが白いローブに分厚い本を装備した出で立ちだ。どうして本で戦えるんだろう。

『数学 Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉 vs Eクラス 中林宏美&三上美子

603点&69点 vs 94点&88点

』

「なっ！ 何よその点数は！」

「僕と数学で当たったのが運のつきだったね」

別に数学以外でも負けないけど（保健体育以外）。

「じゃあ、秀吉、そっちの三上さんの召喚獣の相手をしていて。

危なくなったら手伝うから」

僕は中林さんの召喚獣の前に立つ。秀吉が三上さんと戦っている間、邪魔されないようにしないと。

「点数だけじゃ勝負は決まらないのよ！」

「さっきはFクラスの点数をバカにしたのに今度は点数だけじゃ決まらない、ねえ？」

「うるさいっ！」

中林さんの召喚獣が突っ込んでくる。

「取り敢えず黙って」

倒してしまわないように注意しながら、バットだけを斬る。

大いに驚いている中林さんから目を離し、秀吉のほうを見てみると、「ハッ、ホッ、ハアッ!!!」

三上さんの召喚獣と一進一退の攻防を繰り返していた。

点数は三上さんのほうが有利だけれど、秀吉は前回の試召戦争の経験から

三上さんと互角に渡り合うことが出来ている。

「無視すんな!!!」

中林さんの召喚獣が、殴りかかってくる。

「ちゃんと注意してるよ。それに不意打ちしたいなら声は出しちゃだめだよ」

殴りかかってきた腕を取って壁に向かって投げ飛ばす。

僕の点数の召喚獣は思いのほか力が強く、中林さんの召喚獣は壁にすごい勢いで衝突した後、消えてしまった。

「セイヤアッ!」

秀吉も三上さんの召喚獣を切り伏せて、僕らの勝ちに終わった。

「勝者、Fクラス鮎川、木下ペア」

先生の勝ち名乗りも受け、僕達は空けてしまった喫茶店へと戻った。

**第二十問 クレームと逃走と召喚大会二回戦！（前書き）**

自分の筆の壮絶な遅さが恨めしい作者です。

話は変わりますが、初めて感想をいただきました。

自分の予想以上に嬉しいものです。ありがとうございます。

今後も、より楽しんでいただけるようなお話を考えて行きたいと思っています。

## 第二十問 クレームと逃走と召喚大会二回戦！

清涼祭アンケート

問 『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのよう  
に選ぶべきですか？

「？可愛らしさ？統率力？行動力？その他（）（）」  
また、そのときのリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『？可愛らしさ 候補……姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

鮎川蓮の答え

『？統率力 候補……島田美波』

教師のコメント

クラスでの話し合いではリーダーシップを発揮したそうですね。

吉井明久の答え

『？可愛らしさ 候補……姫路瑞希（訂正）、木下秀吉（訂正）、  
島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるところです。

坂本雄二の答え

『?その他(結婚相手) 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

第二十問 クレームと逃走と召喚大会二回戦!

僕と秀吉は、召喚大会一回戦を終わらせると、すぐに喫茶店に戻ってきていた。

「こんなテーブルで人に物食わせてんのかよ!!」  
喫茶店から叫ぶ声が聞こえる。

「どしたの？」

「あつ！ 鮎川、あいつ等を何とかしてくれない？ 営業妨害よ！」

僕が思わず声を上げると、島田さんが近づいてくる。

「何があつたの？」

「知らないけど、いきなりあの二人がテーブルのクロスはがして中にお客さんに聞こえるように大声で話し始めたのよ！」

姫路さんの転校阻止がかかっている分、島田さんの怒りは平常時の5割増しになっている。

「取り敢えず、雄二が帰ってきたらすぐに連れてきて。あと、秀吉は……」

秀吉に耳打ちをする。

「用意できんこともないが、あつても二つ程度じゃぞ」

「構わないよ。それじゃあ宜しく。僕はあの二人と話してくるから」

「まったく、責任者はいないのか！ このクラスの代表は！」

「代表はただ今召喚大会で不在ですので、代わりに私が承ります」

「なんだてめえ？」

「この2・Fの代表代理、とでもお考えください」

「そうか、ならこの机はどういうことだ！ 汚ねえ机に食い物はま  
ずいし、」

どうなつてんだこの店は！」

目の前の坊主が大声でまくし立てると、店の中からそれに同調する声上がる。

「この机に関しましては、こちらの手違いにより急遽使っているものです。」

本来の机が届き次第、そちらに入れ替えて営業いたします。

料理の味のほうですが、私どもは味見と衛生管理をした上で自信を持ってお客様にお出ししております。こちらと致しましても、まずい、などといわれるのは心外なのですが？」

机に関しては嘘だ。この場合はこうするしか切り抜ける方法はないし、

雄二が来たらまた調達に行けばいい。

「そんなことで納得できるか！ とにかくこんな汚い店を学園祭で出されると迷惑だつて言つてんだよ！」

「お客様の迷惑を考えずに、大声で怒鳴り散らすあなた方も相当に迷惑だと思つたのですか？」

「なんだとっ！」

坊主頭が僕に殴りかかってくる。

僕はその拳をあえて避けずに、打点をずらしながら殴り飛ばされる。僕が殴り飛ばされたのを見て、お客さんは坊主とモヒカンを非難するような目で見える。

一部、僕にさも「自業自得だ」的な視線を向ける奴がいるので、後で個人的にお話しよう。

「お客様、このような公の場で暴力行為とはどういうことでしょうか？」

「こんな大勢の前でやったんだ。言い逃れは出来ねえよな？」

いつの間にか雄二も近くに来ていて、威圧するような声を二人に向ける。

「こ、これはそのウエイトレスの態度がむかついたただけだ！ だいたい店員の教育も出来ねえのかよ！」

「ウエイトレス？」

坊主が苦しい言い訳を並べてくるが僕にとっては最初の言葉が大問題だ。

「ただ、僕は女の子って思われてるとしたら……」

「それではあなた達はムカついたから、という理由で女性を殴るような方なのですね？」

それを利用してもらおうか。

僕の言葉に店内からは一層冷たい視線が坊主とモヒカンに突き刺さる。

「うちの店員に手を出しておいて、無事で帰れるなんて思うなよ！」この隙に雄二が迷惑コンビを脅す。

「う、うるせえ！ 俺達は客だぞ！」

「そうですか『グヘエ』」

雄二がモヒカンを殴り飛ばす。そうですか、解禁ですか。

「あなたはどうしますか？『ブベラッ』」

僕も坊主を殴り飛ばす。

「お、お前ら、何の真似だ！」

「それは私どもの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涇ですか？」

すごい台詞だ。

「パンチから始まる交渉術」なんて言葉も聞いたことないけれど、それ以上に、これだけやってまだ交渉しているつもりなんて。

「ふ、ふざけるな手前ら……グフォッ」

坊主がまたしゃべったので、僕がアッパーカットを入れておいた。ちなみに坊主は宙に舞った後床に倒れて悶えている。

「次に『キックでつなく交渉術』です。最後には『プロレス技で閉める交渉術』」

「が待っておりますので」

「わ、分かった。もう十分だ退散させてもらう」

「そうか、ならこれでおしまいだっ!!」

そういつて雄二がモヒカンの腰に手を回す。

「ちよつと待て、もう帰ろうとしているのにそんな大技を……ゴフ  
アア!」

「じゃあ、僕も……」

「ま、待つてくれ! 反省しているからもうグフアツ!!」

皆まで言わせずに坊主の首に足を掛け、体重移動の勢いで投げ飛ばした。

いわゆる首投げ、という奴だ。

「な、夏川!」

雄二にバツクドロップを掛けられて悶絶していたモヒカンのほうが、僕に投げ飛ばされた坊主を見て叫ぶ。あの坊主は夏川とか言うらしい。

「クソツ! てめえら覚えてるよ!」

モヒカンが気絶した坊主を背負って店から出て行く。

最後の覚えてる、と言う台詞は忘れていって相場が決まっているから忘れよう。

こうして常夏コンビ（雄二命名）による営業妨害は幕を閉じたわけだが、

それでも迷惑コンビが店に及ぼした影響は大きく、既にお客さんの何人かは席を立って移動しようとしている。

「あつお客さん!」

明久が必死で客を呼び止めようとしている。座っていた客の中で一番最初に席を立ったのは紛れもない教頭だったりする。

あの教頭が常夏コンビに一枚噛んでいると見てよさそうだ。

「雄二」

「なんだ」

お客さんに聞かれないように雄二とアイコンタクトで意思の疎通を

図る。

「お客様、失礼しました。此方の手違いでテーブルの到着が遅れていたために暫定的にこの様なものを使ってしまいました。ですが、たつた今本来のテーブルが到着しましたのでご安心ください」

雄二が声を上げるのとほぼ同時に、秀吉とFクラス数名がきれいなテーブルを運び入れた。

新しいきれいなテーブルに入れ替えることでこの場は何とか収まった。

「いや、助かった。あらかじめテーブルを用意していてくれるとはな」

「常夏コンビだっけ？ そいつらが汚いとか言ってたのは聞こえてたからね。」

「少なくともきれいなテーブルを用意しておいたほうがいいと思って」

「でもどうするの？ 秀吉が持ってきてくれた演劇部のテーブルだけじゃ」

喫茶店には足りないと思うんだけど」

明久が聞いてくるがそれは心配無用。

「それについては考えがある」

「そうなの？」

「蓮、お前達次の試合は何時からだ？」

「大体11時過ぎくらいの予定だから小一時間あるかな」

「よし、ならお前も手伝え。明久行くぞ」

「何処に行くの？」

「もちろん、テーブル調達だ」

「それってまさか！」

「こら、坂本君に吉井君、鮎川君まで、待ちなさい！」

僕と雄二、明久はただ今教師に追い掛け回されている途中である。もちろん清涼祭が始まっているので、まともな方法でテーブルが調達できるわけなく、

応接室からテーブルをパクツて、現在運んでいるところなのだ。

「明久、もつとスピードを出せ！　つかまつたら生活指導室行きだぞ！」

「鉄人の根城！？　冗談じゃない！！！」

「現在の状況が分かつたら全力で走る！　先生はそんなに早くないから！」

追ってきている化学の布施先生は運動不足なのかそこまでのスピードはない。

「どうして机を背負ってそんなに早く走れるんですか……」

こうなつたら西村先生に応援を」

布施先生はそうやって携帯電話を取り出す。マズイな。

机を背負って鉄人こと西村先生から逃げ切るのは至難の業だ。

「明久！！！」

「おうよっ　雄二！！！」

鉄人乱入を阻止する手段を考えると、明久と雄二が何かを示し合わせたようだ。

明久が自分の上履きを脱ぐと、そのまま雄二に向かって蹴り上げる。雄二がそれを空中で蹴り、蹴った明久の上靴はそのまま布施先生の右手、

正しくは手に持った携帯を寸分違わずに弾いた。

「流石雄二！！！」

「雄二！ 連絡は！」  
「この先の空き教室に机を置いていくぞ！ そこからは回収部隊が教室に運んでくれる手はずになっている」  
Fクラスの別働隊、回収部隊が僕達がかっぱらった机を喫茶店まで運んでくれるらしい。

「よし、次は職員室そばの休憩室を攻めるぞ！」  
「ハア、蓮はともかく僕と雄二はいつか停学になる気がするよ」  
「仕方ないでしょ。机を手に入れるにはこれしか方法がないんだからっ」

こうして、僕達の必死のダッシュのおかげか、Fクラスの悪評の元、汚れたテーブルは新しいテーブルへと全て入れ替えることができた。

そして次は召喚大会二回戦。

「雄二、次の教科は英語でよかったよね？」

「ああ。お前の点数なら誰が相手でも何とかなるだろう？」

「英語ならね。それより、雄二と明久は大丈夫なの？」

「ああ。問題ない。次の対戦相手はあのカップルだからな」

あのカップルといえばおなじみ卑怯者とヒステリックさんです。

あの二人、特に根本もとい外道はFクラス（特に雄二と僕）に弱みを握られている。

汚い手も容赦なく使う雄二のことだ、外道は悲惨な末路をたどるだろう。

## そして二回戦

僕と秀吉の相手は3年Bクラスのペア。

ここでもBクラスと当たるなんて。

「なんだ？ 相手は2年でしかもFクラスかよ？ 楽勝だな」  
「当たり前だろ。俺達のコンビの前に敵はいないっての」  
「なんだろう。一回戦の中林さんも結構イラっとしたけれど、この二人は更にムカつく。3年はテストが難しいから2年と条件は変わらないのに。」

「それでは、始めてください」

「……試験召喚サモン」

先生の合図で四人全員が召喚獣を呼び出す。

僕と秀吉の召喚獣はいつもどおり。

敵さんの召喚獣は、最初に2年Fクラスをバカにした短髪が特攻服にハンマー。

相方の髪にウエーブがかかったセミロン毛男が西洋風の鎧に剣だ。

「ハッ！ 流石最低クラス、召喚獣の装備も貧弱だなあ！」

僕も秀吉も召喚獣が防具をつけていないことからこんな台詞が出てくるんだろう。

てか、アンタの召喚獣も防具つけてないでしょ。

「そうやって舐めてると足元すくわれますよ、セ、ン、パ、イ」  
続いて彼我の点数が表示される。

『英語 2年Fクラス 鮎川蓮&木下秀吉

633点& 79点

VS

3年Bクラス 鯖島健&石田爽一

167点&201点

『なにっ！』

僕の点数を見て会場全体がざわめく。

600点なんて教師並みの点数らしいからFクラスの生徒が取れるなんて夢にも思っていないだろうから。

「て、てめえみたいな奴がなんでFクラスに！」

「その台詞はもう聞き飽きました。じゃあ、さよなら先輩」

召喚獣を鯖島とかいう先輩の下に走らせ、動揺と点数差からまともに反応できていない

先輩の召喚獣を一閃する。

『英語 鮎川蓮vs鯖島健

633点vs22点』

悪運が強いのか、両断されるすんでのところで防御されてしまった。だが、もう点数は無きに等しい。

もう一人のほうは、

「くっ、意外としぶといな」

秀吉が粘ってくれている。

秀吉の点数ならすぐに方が着くと思っていたのだろう。

だけど、相手も三年生。点数はおるか召喚獣の扱いでも石田先輩のほうが上だ。

『英語 木下秀吉vs石田爽一

18点vs188点』

「くっ、蓮！」

「りょーかーい」

やられそうになっている秀吉のもとへ走る。

石田先輩は僕が援軍に来ることも想定していたようで、短髪よりも反応が早い。

だが、彼我の点数差は3倍以上。

突き出される相手の剣をいなして、左手で切り裂く。

体勢が崩れたところに右手の剣を突き出し、セミロン毛の召喚獣は消滅した。

ようやく此方に追いついた短髪の召喚獣もあっという間に沈めて僕達の勝利となった。

**第二十一問 物語に出てくる悪役って、色々策をめぐらせてたりするけど結局**

最近、何かを続けるのはとても難しいと身をもって実感しています。  
更新も急激に間が空きだしましたね。

努力します……………

第二十一問 物語に出てくる悪役って、色々策をめぐらせてたりするけど結局誰

バカテスト 化学

問『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

鮎川蓮の答え

『ハーバー法とは、400度〜600度の高温下で、窒素と水素を直接反応させてアンモニアを生成する手法である』

教師のコメント

どうやら、問題の記述に誤りがあったようですね。

ですが、できれば塩化アンモニウムと反応する物質も書いてほしかったです。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

第二十一問 物語に出てくる悪役って、色々な策をめぐらせていたりするけど結局頭悪い人ばかりだよな。

「しかし、蓮の英語は流石の点数じゃの。それ点数に勝てるものは教師くらいじゃろ」

「その辺の教師には負けたくないけどね。それに僕にも苦手な教科はあるし」

「あれかの？」

「あれです」

あれ、というのはもちろん保健体育のこと。

ただ苦手なんじゃなくて僕はある理由で保健体育の内容を覚えられないんだけどね。

その理由は万が一機会があれば。

「鮎川蓮君だね？」

秀吉とFクラスに戻る途中で、後ろから声を掛けられた。

「はい。僕が鮎川蓮ですが、何か用ですか、教頭先生？」

僕に声を掛けたのは今回の清涼祭での第一級要注意人物、というか僕の見立てでは黒幕の竹原教頭だった。

「召喚大会の件で少し話しがある。時間は大丈夫かね？」

「秀吉、僕は教頭先生と話してから戻るから、先に喫茶店に帰っておいて」

「分かったのじゃ。お主も遅くならんようにの」

秀吉に先に戻らせる。これで僕と教頭の2人だけがここにいる。

「……付いてきなさい」  
教頭は短く僕にそういうと一人で歩き始めた。  
終始無言に見えるけれど、「これが学園長の……」とか、  
「捨て駒にはちようどいい」とかぶつぶつ独り言を言ってる。  
特に二番目は気に入らない。僕を捨て駒扱いか。

「入りたまえ」  
通されたのは教頭室。

教頭は僕を無視してさっさとソファーに座ってしまった。

「話ってなんですか？」

「まずは座りたまえ」

そついわれて、僕もソファーに腰掛ける。

「それで話というのは？」

「まあ、そう急かさなくていいか」

「僕はクラスの出し物もあるので、出来れば手短にお願いしたいのですが」

「ふむ……ならば単刀直入に言おう。君、私の下に付きなさい」

「単刀直入ですね」

「君にはもう察しが着いているのだろう？」

「隠す気はない、ということですね？」

「まあ、そういうことにしておいてくれ」

「それで？ 下に付け、とは？」

「ああ。簡単なことだよ。この清涼祭期間中、私の命令に従って動いてくれればいい」

教頭は僕が一般性とのカテゴリに入っていることを知らないのだからか。

一般生徒とこんな取引のようなことをするなんて教育者として失格だ。

「まさか、ただでこんな危険性のあることを生徒にやらせようとは思いませんよね？」

「もちろんだよ。君が私の下についてくれるならば、学校生活を送る上で

あらゆる君への高待遇を約束しよう。君の本来の振り分け先であるAクラスにも

入れるように手配しよう」

鎌をかけただけのつもりだったのだが、教頭はまったく気づかずにべらべらと話してくる。

「教頭先生の目的はなんですか？ こういった取引は表沙汰になればあなたにも都合が悪いはずですが？」

「ふふ、聞いたとおり聡明だな。私の目的か、そうだな、

『駒を最適なところに置く』かななるほど。

こいつは試験召喚システムが目的か。

それも、誰かに雇われているのだろう。

「成る程。大体の条件は分かりました。確かに僕にとってはいいい案件のようだ」

「そうか、ならば」

「お断りします」

「っ！ な、何故だね！」

「僕は自分ひとりのためにその他大勢、今回はこの文月学園全体を危険に曝すことはしたくないんですよ。それに……」

「それに、何かね？」

「僕はそれなりにFクラスが気に入ってますし」

「だが、私の計画が成功すれば」

「『文月学園は乗っ取られる』もしくは『文月学園はつぶれる』で  
すか？」

そんな大それた事あなたに出来るわけないでしょう？

それに、人を捨て駒扱いするような人間に付いていけるほど甘い環境で育ったわけではないので」

捨て駒発言。教頭はこれを聞かれているとは思わなかったのか大層驚いている。

「何故それを聞いている！ 君は私から10m以上離れていたはずだ！

普通の学生ならあの距離の独り言など聞き取れるわけがない！」

「まあ、“普通の学生なら” 聞き取れないでしょうね」

「な、なら君は」

「はい、今日はそこまでにしましょうか。僕もクラスに戻らないといけないので」

「くっ……まあいいだろう。だが、私の誘いを断ったこと、後悔するよ」

教頭が言い終わる前に部屋を出て行く。

そのときの僕はきつとこっぴどいていただろう。

「そういう台詞は死亡フラグだぜ、三下」

教頭との腹の探りあい（というか僕が一方的に探っただけだが）を

終え、

僕はFクラスの喫茶店に戻ってきた。

「あ、お帰り蓮」

明久が声を掛けてくる。

「ただいま。って、皆どうしたの？」

僕が入ってこなかったほうの入り口近くでFクラスの皆が人垣を作っている。

「うん。なんか小さな女の子が来て、皆そっちにかかりきりになっちゃって」

なんともFクラスらしい理由である。

と、いうかあいつらは女なら年は関係ないのか？

「で？ 探してる人はどんな人なんだ？」

「はい。バカなお兄ちゃんでした」

とんでもない会話が聞こえてくる。

雄二が皆を見回す。“バカなお兄ちゃん”という特徴に当てはまる人を探しているんだろう。

「そうか……沢山いるんだが」

否定できない。

「他に何かないか？」

「えつと……とつてもバカなお兄ちゃんでした」

「……吉井だな」「……」

クラスの声が一致する。明久を見ると、哀れだ。ちょっと涙目になっている。

「雄二、僕に小学生の知り合いなんていないよ？きつと人違い」

「あつ！ バカなお兄ちゃんだ！」

「人違い……ねえ？」

「人違いだと……いいなあ」

明久、そろそろ腹を括ろつ。  
君の特徴は良くも悪くもその頭から来ている。

「で？ その子は誰なの？」

「うーん……僕に君みたいない知り合いはいないよ？ 人違いじゃないかな？」

明久はこの期に及んでまだ思い出していないらしい。

「知らないってひどい！ 葉月一生懸命『バカなお兄ちゃんは何処ですか』って

いろんな人に聞いて来たのに！」

こ、この子何者だ！ 明久の急所を無意識ながら的確に攻撃している！

「そうか……バカなお兄ちゃんがバカで悪かったな」

「バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう」

「でもでも、葉月はおにいちゃんと結婚の約束もしたのに！！」  
爆弾を投下した。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！！」

「ぐわあ！！」

流れるような、端から見れば美しいような動きで  
姫路さんと島田さんは明久の首を絞めていた。

「姫路に島田、どうやら勝ったようだな」

「雄二、今心配するのはそこじゃないでしょ」

「瑞希、首をそのまま捻って！ ウチはひざを逆方向に曲げるから  
！」

「はい！ えっと、こうですか？」  
イカン。このままだと近いうちに死人が出かねない。

「ちよつと待つて！ 僕は結婚の約束なんて全然」

「ふええええん！ 酷いです！ ファーストキスまであげたのに！」

これは……明久の自業自得だな。

「坂本！ 包丁持ってきて！ 5本あれば足りると思うから！」

「吉井君！ こんな悪いことするのはこの口ですか！」

「ほへはいへふ！ ははひほひへふはい！（お願いします！ 話を聞いてください！）」

二人はヒートアップしちゃってるし。

「仕方ないわね、2本刺したら聞いてあげるわよ」

島田さん、包丁は1本刺さるだけで十分に致命傷だと思うんだ。

「ちょ、美波！ 包丁は一本刺さるだけでも致命傷なんだよ！

お願い助けて！ 雄二！ 蓮！」

仕方がない。明久が殺される前に止めるか。

「二人とも、それ以上やったら本当に洒落にならないから！

明久を拷問するのは清涼祭が終わってからでもいいでしょ！」

「待つて蓮！ それだと根本的に僕の危機が回避されたわけじゃないよ！」

「一日でも寿命が延びたんだから後は自分で何とかしてよ。

「止めないで！ ウチはこいつを殺さないといけないのよ！」

「……ゴメン明久」

「諦めるの！？ もうちよつと粘つてよ！」

ここまで僕の話の聞いてくれないとちよつと凹む……

「あつ、お姉ちゃん！ 遊びに来たよ！」

「あれ？ 葉月？ え？ 葉月とアキって知り合いなの？」

「うん……あつ、思い出した！」

「何？ 結局、明久と葉月ちゃんは前に会っていたってことでいいの？」

「うん。去年ちょっとね。それより、美波は何で葉月ちゃんを知ってるの？」

「何でって、ウチの妹だもの」

ほう……それはつまり

「島田さんは自分の妹の声も分からずに明久を殺しかけたってことだね」

「うっ……クラスの人ごみで声が良く聞こえなかったのよ！」

まあ、そういうことにしておこう。

「吉井君はズルいですが、どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？」

もしかしてもう『お義兄ちゃん』になってたりして……」

「姫路さん、取り敢えず戻ってきて……」

本当、事態の收拾が追いつかなくなってきた。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

雄二の言葉で、皆は辺りを見回した。

僕が帰ってきたときにはもう、店は閑古鳥が鳴いていた。

「そういえば葉月、ここに来る途中でいろんな話を聞いたよ」

「ん？ どんな話？」

葉月ちゃんの言葉に一番早く反応したのは明久だった。

「えっとね、『中華喫茶は汚いから行かないほうがいい』って」

店内は掃除もいきわたっているし、装飾もしつかりしている。唯一“汚い”のは、テーブルだったけど、そのテーブルは新しいものに替えたからそんな噂が立つ原因がない。

「ふむ……例の連中の妨害がまだ続いているんだろうな。探し出してシバキ倒すか」

「常夏コンビってそこまで暇なの？」

「まあ、後輩の店を営業妨害するような人間だから、十中八九自分のクラスでもお荷物扱いでしょ」  
もしかしたらそれ以外の理由があるかもしれないけど。

「まず、様子を見に行く必要があるな。チビツ子、その話は何処で聞いたんだ？」

「チビツ子じゃないです、葉月です！」

「じゃあ、葉月ちゃん、その噂は何処で聞いたか教えてくれない？」

「はい。えっと、短いスカートの女の人がいっぱいいるお店でした！」

多分何かのコスプレをしているお店なんだろうけど、そんなことを言ったら真っ先に反応するのが……

「何だつて！ 雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 店のために（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」

そんなことを口走りながら、明久と雄二は走り去ってしまった。そんな中、残されたメンバーは、

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ！」

「取り敢えず、明久たちだけに任せておくのも不安だし、

僕達もお昼の休憩をかねて行ってみようか？」

「……そうじゃの」

僕達も明久と雄二の後を追う。

厨房からムツツリー二の気配が消えているのが気になるけど。

第二十一問 物語に出てくる悪役って、色々策をめぐらせてたりするけど結局

なんだか蓮の性格変わってね？ と思われる方もいるかと思いますが、

蓮の素は案外黒かったりします。

次回も出来るだけ早くに……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3452x/>

---

バカと白黒と召喚獣

2011年11月2日15時11分発行